



バンツッ! バンツッ! バンツッ! バンツッ! バンツッ! バンツッ!
トリーニングルームに鈍い連続音が響く
あっちやと、またやちやたあ...
トリーニングで汗を滴らせたマルタさんがへペるとばかりに舌を出す。
マルタさんのパンチで哀れなボロくずとなったサンドバッグが床の上に横たわっている。

おほん... 見ていらしたんですか、霊基の出力調整をしてもらったんですが
あまりにサンドバッグを壊すもので、
もうと弱体化させてからでないかとダメです。ね。
マスターはボクシングに興味がああるんですか?」

コよければ私とやってみますか? なんこー♡
マルタさんが何気なく
笑顔を冗談交じりに言ったその言葉に、
俺は思わずドキドキしてしまったのだ。





人気がない深夜のリング…、
ここでマルタさんがウオームアップしながら俺を待っていた。
来ましたね♥ ふっ、深夜のリングで男と女がふたりきり…
それでやる事と言ったら…
ボツクスしかないですよ♥



(こうやって改めてマルタさんのビキニ姿を真正面から見ると…
つくづくエッチな身体してるなあ…)
思わず股間に血液が滾ってしまいそうになる
さあ、リングに上がって♥
ちゃんと手加減してあげますからね♥

人気がない深夜のリング…、
そこで私はウォームアップしながらマスターを待っていた。
来ましたね♡ ふっふっ、深夜のリングで男と女がふたりきり…
それでやる事と言ったら…
ボツクスしかないですよね♡ ♪



（私とボクシングしてみたいだなんて、
マスターも大概命知らずですね…
そんな無謀な所も気に入ってますけど♡
さあ、リングに上がって♡
ちやんと手加減してあげますからね♡ ♪





（自分で普通の女の子とか言っちゃやうあたりがマルタさんだなあ…）
「マスター、何か失礼なこと考えてませんか？」「ひえっ…」
「ほらほら、普通の女の子とボクシングして負かちやうの怖いんですか？大丈夫ですよ、マスターだってそんなに鍛えた筋肉がついてるんだから、自信を持って♡♡♡
「そう言っでマルタさんが俺の腹筋をグローブ越しにさわさわと撫でてくる」



ニムッ

「約束通り、霊基の出力を最低まで落としてもらいました♡
レベル1ですよ？これで私も普通の女の子と変わらないですね♡
これでマスターとボクシング出来ますよ♡♡
マルタさんがにっこりと無邪気な笑顔を向けてくる」



(微妙な表情…)
「マスター、何か失礼なこと考えてませんか?」「ひえっ…」
「ほらほら、普通の女の子とボクシングして
負けちゃうのが怖いんですか?大丈夫ですよ、マスターだって
こんなに鍛えた筋肉がついてるんだから、自信を持って♡」
「そう言っでマスターの腹筋を
グローブ越しにさわさわと撫でて確かめる
♡ん♡ん♡、これなら本気でパンチ打っても大丈夫そうね♡」
私はマスターが頼もしくついて嬉しくなってしまうっ

000
ニム



「約束通り、霊基の出力を最低まで落としてもらいました♡
レベル1ですよ? これでも普通の女の子と変わらないですね♡
これでマスターとボクシング出来ますよ♡」





マスターレベルとは違うと思う……
マルタさんがゴングのタイマーをセットして
二人ともリングの中央へ向かう



二人、自分のコーナーに分かれて準備を整える
俺はグローブとマウスピースの調子確かめた

私はレベル1になっちゃいましたけど、
マスターのレベルはいくつでしたっけ？
150？160？
これだけハンデがあつて
負けるわけにはいかないわよね♡
そう言いながらマウスピースを唾えるマルタさん



（楽しんでもらいましょ♡）
私はゴングのタイマーをセットして
二人ともリングの中央へ向かう

「私はレベル1になっちゃいましたけど、
マスターのレベルはいくつでしたっけ？
150？160？
これだけハンデがあつて
負けるわけにはいかないわよね♡
そう言いながらマウスピースを唾えた



二人、自分のコーナーに分かれて準備を整える
マスターはグローブとマウスピースの調子を確かめている





マルタさんがかわいらしくファイティングポーズを取って
手招きをしてくれる
『では、マスターの日々のトレーニングの成果を見てあげましょう♡
胸を貸してあげますよ、かかっけてきてくださいっ♡』

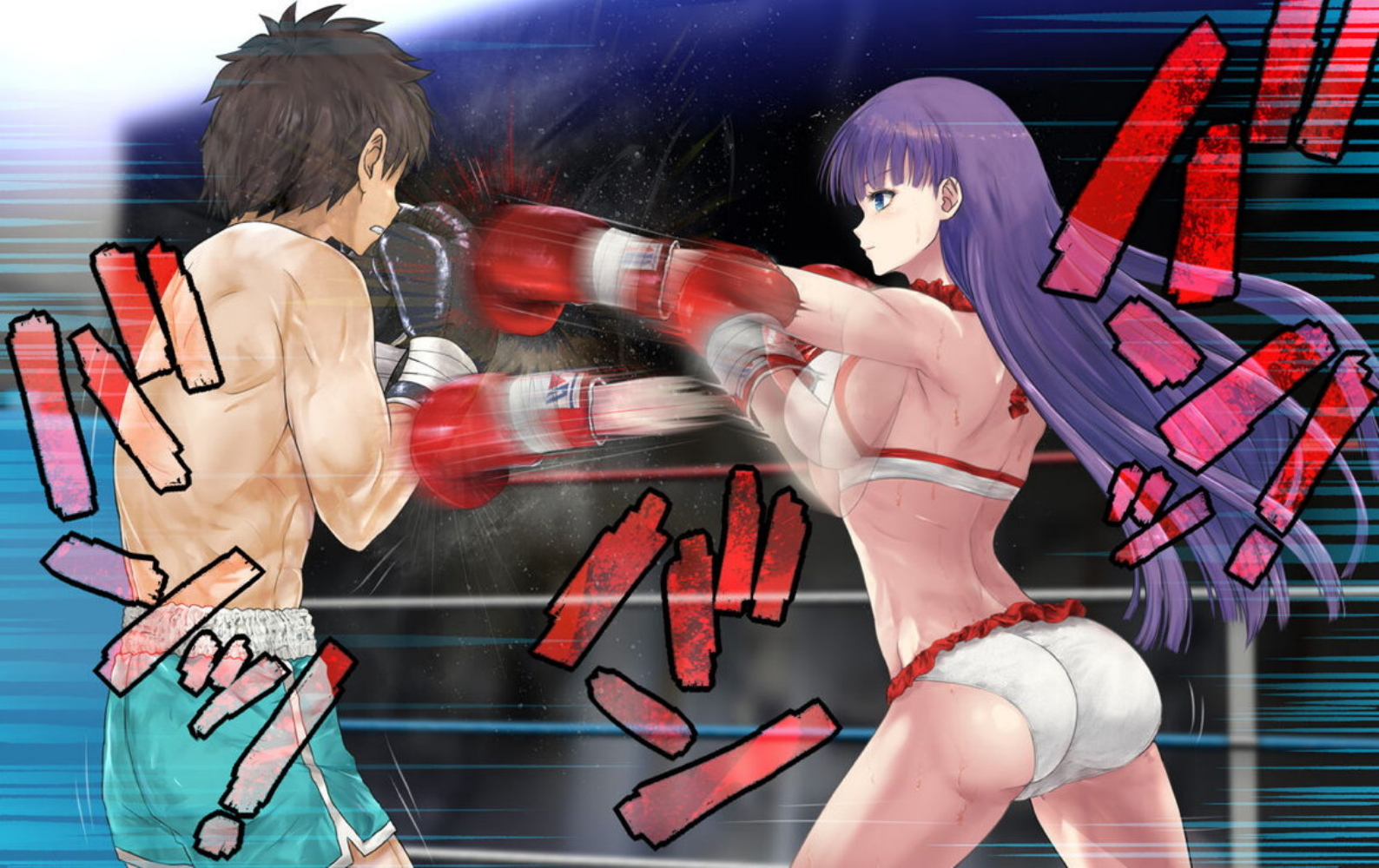
『どちらかの足腰が立たなくなるまで…、徹底的にやり合いましょっね♡』
マルタさんがにっこりと俺に嬉しそうな笑顔を向ける
『優しくしてね…?』
『優しくノックアウトしてあげますよ、マスター♡』



私はファイティングポーズを取って
マスターを手招きをした
『では、マスターの日々のトレーニングの成果を見てあげましょう♡』
胸を貸してあげますよ、かがってきてください♡

クイ
クイ

『どちらかの足腰が立たなくなるまで…、徹底的にやり合いまししょうね♡』
『優しくしてね…?』
『優しくノックアウトしてあげますよ、マスター♡』
私はにっこりとマスターに嬉しげに笑顔を向ける



カーンッ！ 自動で試合開始のゴングが鳴ると
マルタさんがキユツと足音を鳴らして近づいてくる
可じゃあ軽くいくわよ！
すかさずマルタさんがジャブを打ち込んでくる
バシッ！ バシッ！



リングを時計回りに回りながら
俺の腕に遠慮なくピンバシと矢継ぎ早にジャブを当ててくる
(さすがマルタさんのパンチ：ジャブだけで腕が痺れてくる)

カーニッツ！ 自動で試合開始のゴングが鳴ると私はキュツと足音を鳴らしてマスターに近づいていく。可じゃあ軽くわよ！
すかさずマスターへジャブを打ち込む
ハッ！ハッ！ハッ！



リングを時計回りに回りながらマスターのガードに遠慮なくビンパシと矢継ぎ早にジャブを当てる。へん！この程度のジャブだとビクともしないんだ……♡



タン

タン

タン

タン

タン

タン

マルタさんの出だしのギアの高さに
思わず弾かれるようにバックステップで距離を取ると
意外にもマルタさんは追撃をしてくれない
息を乱すこともなくタノタンとステップを取っている
上下のリズムミカルなくステップの縦揺れに合わせて
マルタさんのおっぱいがふるふると揺れている

タン

可憐らっ、打ってこないの？
私に強いところを見せてくれるんでしょ？
（よおし、今度はこっちのパンチを見せてやる……！）

タン

ゆた

キョッ

キョッ



私のいきなりの打ち込みは面食らったようで
思わぬ弾かれるようにバックステップで距離を取る
私はあえて追撃をせず、マスターのテップを高めることにする
まだ息を乱すこともなく、マスターとステップを取ってマスターの様子を見る
上下のリズムミカルなステップの縦揺れに合わせるように
私の気持ちも胸も弾んでいる

タン

可憐らっ、打ってこないの？
私に強いところを見せてくれるんでしょ？
（笑）
（楽しんでてもらわなくちゃ…♡）

タン

キョッ

キョッ





ジャブを打ち込んでいくが
マルタさんはスウエーで上体を揺らし
のパンチはマルタさんの目前数センチで止まり
完全にパンチを見切られている



大事なのはパンチをただ打つよりも、パンチを当てる事ですよっ！
上体に打ち分けるっ！
マルタさんは俺にアドバースを飛ばす余裕を保っている
キアをもう一段上げる……！

キアッ

キアッ

マスターはジャブを打ち込んでくるが
私はスウェーデンで上体を揺らし
私の目前でセンチで止まる所で
彼のパンチを見切って止める



大事なのはパンチをただ打つよりも、パンチを当てる事ですよっ！
上打に打ち分けるっ！
私はマスターにアドバイスを飛ばす余裕を保って彼のパンチを躲す
マスターのギアが上がってきた……



一歩踏み込んでインファイトを仕掛けていく
するとマルタさんはガードを固めて真っ向から俺のパンチを受ける
パンチを受け止めるたびにマルタさんの大きな胸が反動で揺れる



上下に打ち分ける俺のボディをマルタさんは腹筋で受け止める
俺の攻撃をもともせず、じりじりと戦車のように近づいてくる

くっ...くっ...くっ...

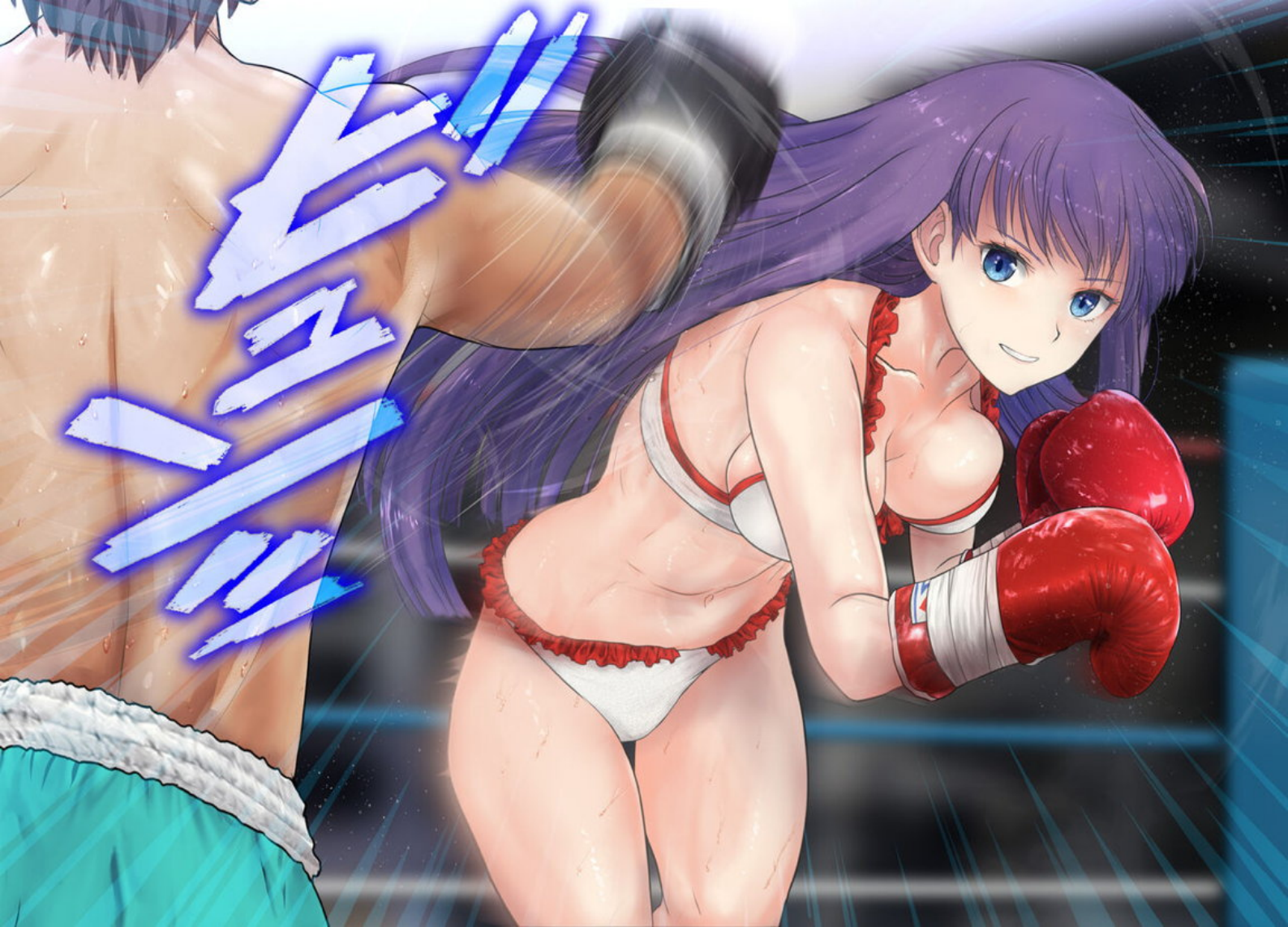


マスターは一步踏み込んでインファイトを仕掛けてくる
私はガードを固めて真っ向から彼のパンチを受け止める

ガードを叩かれてパンチを受け止めるたびに重心を揺らされる
(なかなかの強いパンチ...!)

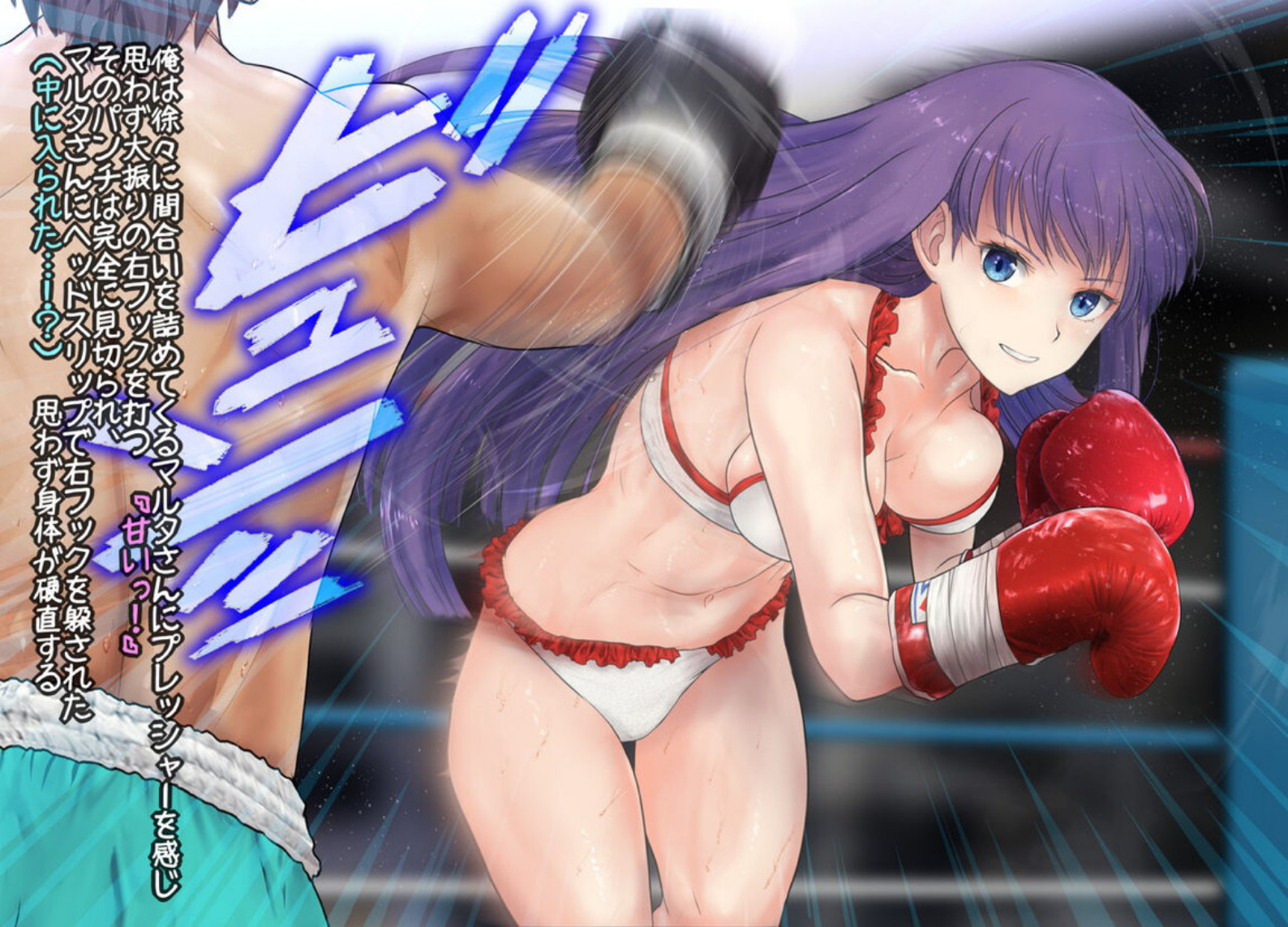
パンチ
パンチ
ぶっ

マスターは私のアドバイス通りパンチを上下に打ち分け
私のボディを叩いてくるが私は腹筋で受け止める
マスターの攻撃に揺さぶられず、私はじりじりと近づいていく
私はそこでマスターの焦りを感じる



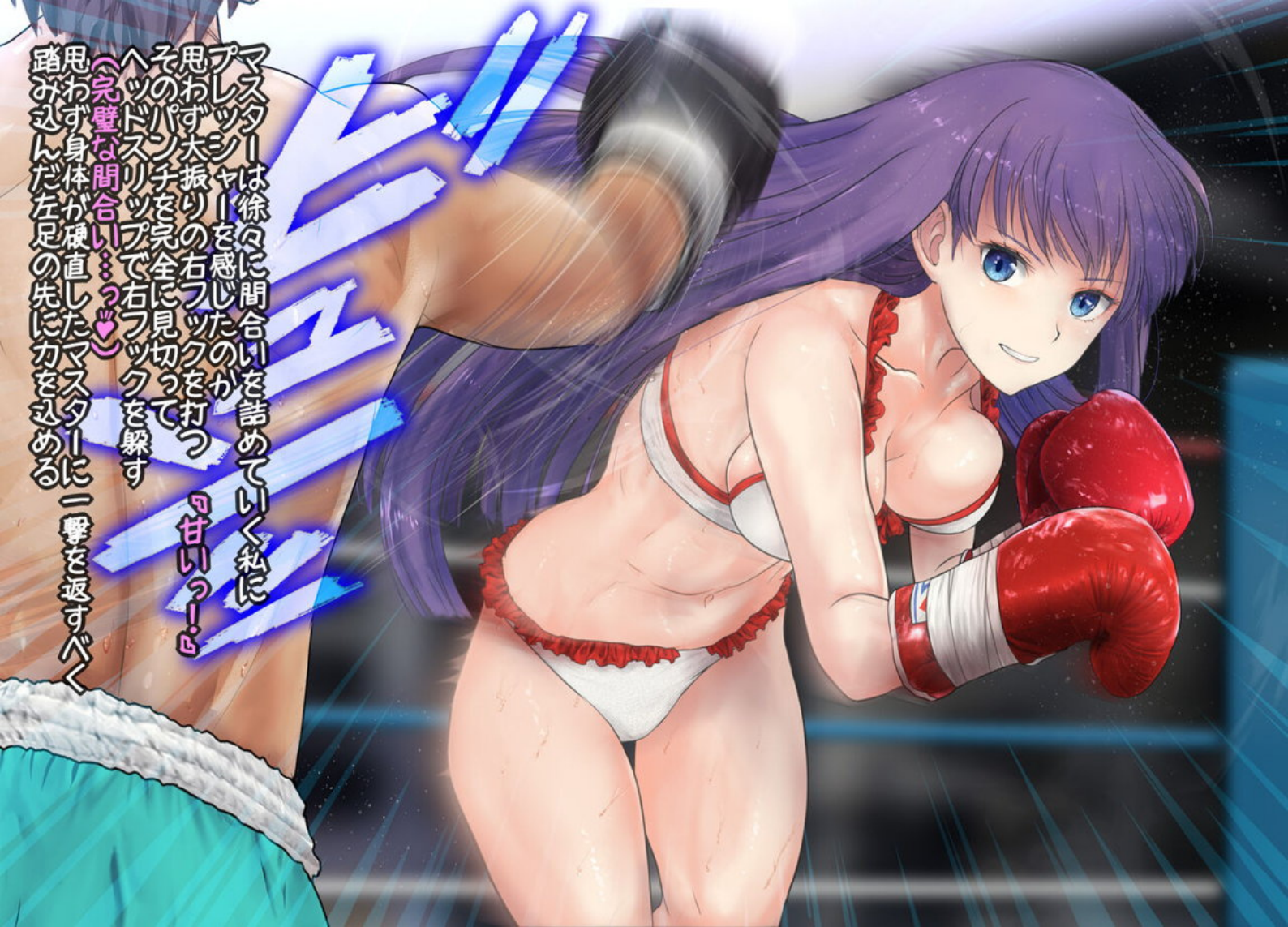
俺は徐々に間合いを詰めてくるマルタさんにアレッシャーを感じ
思わず大振りの右フックを打つ『甘いっ！』
そのパンチは完全に見切られずで右フックを躲された
マルタさんには完全に見切られずで右フックを躲された
へ中に入られた……？
思わず身体が硬直する

アレッシャー

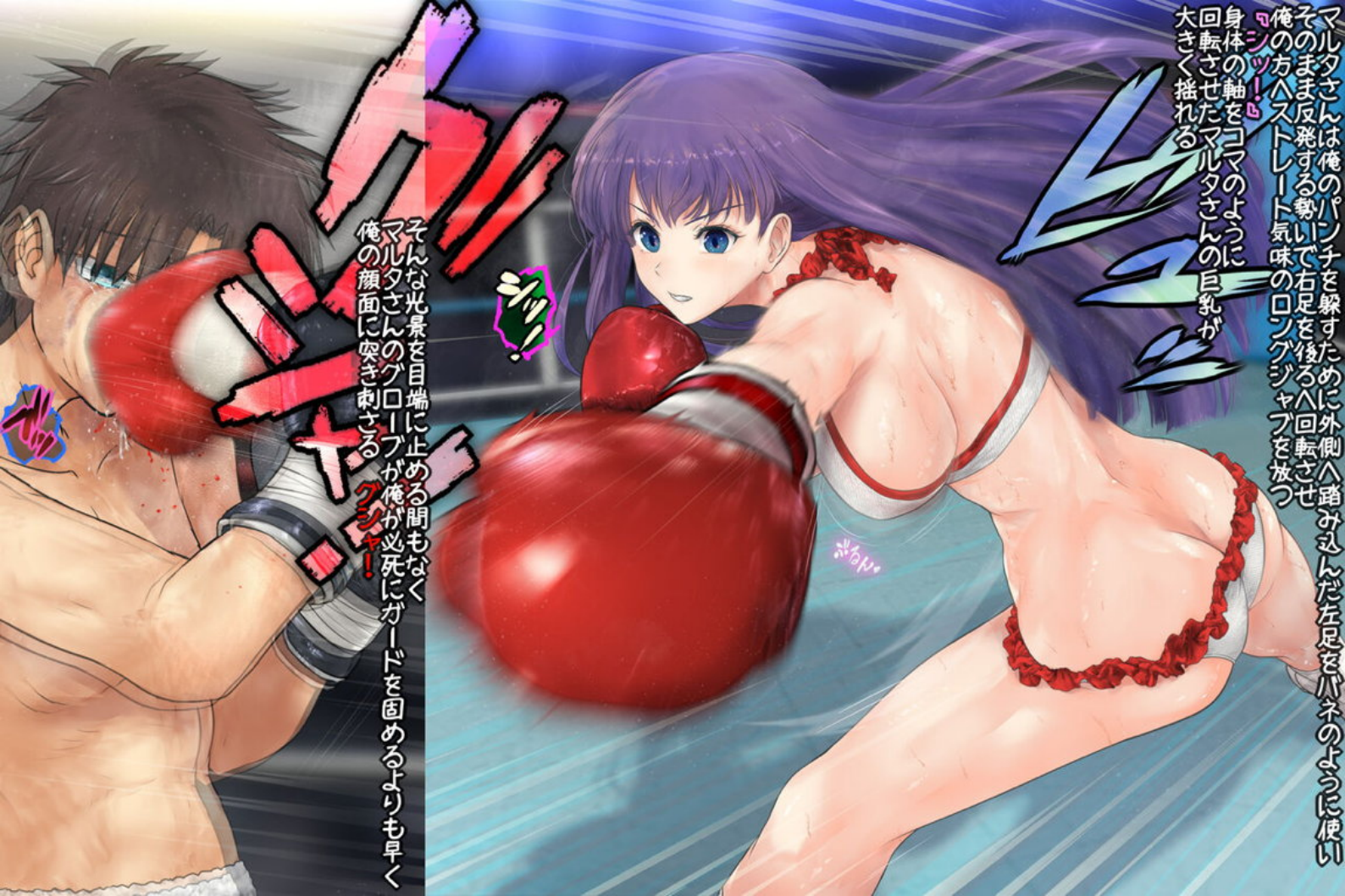


マスターは徐々に間合いを詰めていく私に
アレスチャーを感じたのが
思わず大振りを打つ
そのパンチを完全に切っ
ヘッドスリッパで右フックを繋ぐ
（完璧な間合い……っ♡）
思わず身体が硬直したマスターに二撃を返すべく
踏み込んだ左足の先に力を込める

『甘いっ♡』







マルタさんは俺のパンチを躲すために外側へ踏み込んだ左足をバネのように使い
そのまま反発する勢いで右足を後ろへ回転させ
俺の方へストリート気味のロンググジャブを放つ
「シツッ！」
身体を軸をコマのように
回転させたマルタさんの巨乳が
大きく揺れる

そんな光景を目端に止める間もなく
マルタさんのグローブが俺が必死にガードを固めるよりも早く
俺の顔面に突き刺さる
「クッ！」

「クッ！」



私はマスターのパンチを躲すために外側へ踏み込んだ左足を
バネのように使
そのまま反発する勢いで右足を後ろへ回転させ
マスターにストリート気味の
ロングジャブを放つ

身体シツク!の軸をコマのように
回転させた私の胸が
大きく弾む

エヘ!

マスターが私の反撃に必死にガードを固めるよりも早く
私のグローブがマスターの顔面に突き刺さる
グシャ!

くわくわく? 気持ちいい! っ!

エヘ!



マルタさんは俺にパンチを当てた反動を利用し
再びグルンと上半身を回転させて右フックを放つ
俺はマルタさんの息もつかせぬ連続コンビネーションに
全く対応できず
そのままマルタさんの強烈な右フックを顔面に受け入れた
バグンッ！
ぶぶっ！

マルタさんの強烈な一撃に早くも鼻血が吹き飛ぶ
その衝撃の反動でブラからこぼれそうなほど
マルタさんのおっぱいが弾む
視界に星が飛び、頭がぐらくらくする
(マルタさんのパンチでいきなり気持ち良くされてしまった……)



私はマスターにパンチを当てた反動を利用し
再びグルンと上半身を回転させて右フックを放つ
マスターは私の息もつかせぬ連続コンビネーションに
全く対応できないで
そのまま私の強烈な右フックを顔面に受け入れた
バグンッ! ぶふっ!

私の強烈な一撃に早くもマスターの鼻から鼻血が吹き飛ぶ
その衝撃の反動でブラからうぼれそうなるほど
私のおっぱいが弾んだ
パンチの余韻に私の心も負けずおろろろ心も弾む
びゅっ! びゅっ! びゅっ!







「もう一発う！ふっ！」
「ドボオッ！」
「フイルタさんのエグいコンボネーションの
が俺のみぞおちに叩き込まれる
「ウツ！？」 思わず肺から呼吸を絞り出され
「みっともない声をあげさせられてしまっ
「完全に呼吸の自由を奪われ
「くの字に折り曲げられた体勢のまま
「膝をつき、前のめりに倒れ落ちてしまった。
「あまりの苦しさに何も物を考えられない





「もう一発う！ ふっ！ ドボオッ！」

私の自慢のコンビネーションのイブローを

フイニッシュを飾る渾身のボディーを

マスターのみぞおちに叩き込む

「ウッ！？」 思わずマスターは肺から呼吸を絞り出され

みっともない声をあげてしまった。そのままたまに折れ曲げられた体勢のまま

膝をつき、前のパンチで、くの字に崩れ落ちてしまった。その瞬間はたまたま

私の目の前で、相手のリングに沈むこの瞬間はたまたま



スリー

ワッ

コッ

おっ

うおえっ...

うぐっ...

滑る

滑る

滑る

(息が)できない...!!
マルタさんのパンチで思わずリングに耐えられずおれて
内臓を潰されたかと思うような苦しみにく耐える
うぐっ...うおえっ...
まだ始まったばかりですよ? (う)ん、マルタさんのパンチ...
前屈みになつて俺の様子をうかがうマルタさん、立ってくださいね
それじゃカウント入れますよ、わーん、タさん、すり...
マルタさんが嬉しそうな声でカウントを数え始める

おはっ

ウーン

ウーン

スリー

うおえっ...

ががる

ががる



(ダウン...)♡
 マスターは私のパンチで思わずリングにくずおれて
 内臓を潰されたかと思うような声を上げて苦しみに耐えている
 うぐっ...♡
 まだ始まってたばかりですよ？
 (まだ終わって立ってくださいな♡) 泣る
 前屈みになってマスターの様子をうかがう
 うぐっ...♡
 (うぐっ...)♡
 それじゃ、まだ入れるますよ♡
 わーん、つー、すりー...♡
 マスターの丈夫な様子に、まだ試合が続けられると
 つい嬉しそうな声でカウントを数え始めてしまう

おはっ♡

ワッ

ウー

スリー

うおえっ...

泣る

泣る





シックス

セブン

ムム

「フオー、ファイブ... マルタさんのカウントが進む
俺は腹の痛みをこらえながらリングに手をついて立ち上がる
シックス、セブン... やうぱり立ち上がれましね♡
「ハア... ハア...」 マルタさんの目を見ながらフアイティングポーズを取る
「まだまだ闘志を分です... そういうところが好きですよ、マスタ...♡
（何がレベル1のパンチだよ... こんなの男でもそう耐えられないぞ...）」

ムム...

ムム

ムム...

ムム

「でも私に敵わないって思ったら、
私に令呪使ってもいいんですよ？
「何とハノデあげないしと私には敵わないじゃありませんか？
「何言ってるんだよ...」 レベル1の女の子のパンチが効くわけないだろ...
「強ひつてさすが私に見込んでマスタ...♡
「マルタさんが再び俺に向かってフアイティングポーズを取る」

シックス

セブン

んま

「フオー、ファイブ...」 私の数えるカウントが進む
 「マスターは痛みをこらえながらリングに手をついて立ち上がった
 「シックス、セブン...」 やうぱり立ち上がれましてね♡
 「ハア...ハア...」 マスターが私の目を見ながらファイティングポーズを取る
 「まだまだ闘志充分ですね、そういうところが好きですよ、マスター♡」
 「その不屈さ... 私のパンチで叩き潰してあげますよ♡」

グググ...

んま

んま...

んま

「でも私に敵わないって思ったら、
 私に令呪使ってもいいんですけどよ？
 「何言ってるんだよ...」 レベル1の女の子のパンチが効くわけないだろ...
 「ひひひ...」 さすが私の見込んだマスター♡
 「強がりだとしてもそう言うガツがあるところ大好きですよ♡」
 「私は再びマスターに向かってファイティングポーズを取る」



試合が再開すると息もつかせずマルタさんが攻めてくる

とにかくガードを固めてマルタさんのパンチの嵐に耐える

マルタさんの左の連打に

打たれて腕がまるで重い棒のよう感じる

でも必ずこの連打の最後に機会が来るはず…

マルタさんのラッシュの打ち終わりまで

耐えられた相手はいなかったから…!



試合が再開すると私はマスターに息もつかせず攻めていく
とにかくガードを固めて私のパンチの嵐に耐えるマスター

「優しくこのまま一気に仕留めてあげますよ……」

私の左右の連打に打たれてしまっているマスターの腕が

みるみる痺てどす黒くなっているだけですよ。

私のラッシュの打ち終りまで耐えられた相手はいないんだから……」





マルタさんのコンビネーションを締める右ストレートが目の前に飛び込んでくる
だがマルタさんの踏み込む呼吸に、俺はその気配を讀んでいた
マルタさんのグローブが後ろ髪をかすめて焦がしながらギリギリでマルタさんの右ストレートをタツキングで躲す



これをまともにガードで受けていたら
両腕のガードごと腕を弾き飛ばされていたら
すぐ上で決定打のパンチを避けられたマルタさんが息を飲む音が聞こえる
(こ)だ……) 千載一遇のチャンスをつかむべく俺は左腕に力を込める

（このままガードをし開けてとどめを叩き込んであげるっ！）

私のガードを破り、両腕に付けて叩き込む。私がそのパンチは手ごたえを残さず、私のグリップはマスターの後ろ髪をかすめて焦がし、マスターはギリギリで私の右ストレートを逃がした。私の右ストレートを避けていた。タツキングで躲していた。

イッ

グッ

これをまともにガードで受けさせていたら腕のガードごとマスターの腕を弾き飛ばしていたら大振りのパンチを避けられて私は思わず息を飲む（やられるっ！）

マスターを仕留めるはずが逆に千載一遇のチャンスを与えてしまった





マルタさんの長い髪がたなびき
汗の光の玉と甘い匂いがあったりに飛び散る



体勢を崩したマルタさんの顔面に向けて
左フックを打ち込む
グローブに確かな感触を感じながら
俺は思い切り左腕を振り抜いた



私の長い髪がたなびき
視界には汗とよだれの光の玉があたりには飛び散る



体勢を崩した私の顔面に向けて
マスターの左フックが打ち込まれる
マスターの硬い拳の感触を感じながら
私は振り抜かれたパンチに顔を弾き飛ばされる



拳にマルタさんの頬骨の感触が伝わり
潰されたマルタさんの唇から再びよだれの玉がしづく



続けざまにコンビネーションの右フックをマルタさんの左頬に打ち込む
ボクシッ！ (マルタさんに教えてもらったコンビネーションだ……)
体に染みついた動きがよごみなく行われ、
俺の右拳が柔らかいマルタさんのほっぺたに沈み込んでいく

続けざまにコンビネーションの右フックが私の左頬に打ち込まれる
ポクッッッ！！
（っ）れ…私が教えてあげたコンビネーションじゃない…！！
マスターの体に染みついた動きがよどみなく行われ
彼の右拳が私のほっぺたに沈み込んでいく



頬骨にマスターの拳の感触が伝わり
潰された私の唇から再びよだれの玉がしぶく



アハハ

うんうん

（俺はいつだって強いマルタさんを見てきた…!）

「マルタさんの打ってきた
コンビネーションはちやんと知ってる…!
凄さも威力も、どの角度、どのタイミングで打つのかも…!」

（へと言ってもマルタさんが
パワーダウンしてなかったら
本当は俺にはどうすることも
できないのだけれど…!）

うぐ…

ふは、

マルタさんの顔から
グローブを引き抜くと
マルタさんが苦悶の表情を覗かせる

「ずい… マスターがいつもそんなふう
にちやんと私の事見てくれたなんて言われたら…!
嬉しくてノクノクしちゃうじゃない…!」

俺のパンチにマルタさんが身体ごと後ろにグラつく
でも今は…マルタさんに届く…! 俺のパンチが届く…!
だから力の差を理解したその上で…俺はマルタさんに勝ちたい…!」

（もう…!）
俺はそのままマルタさんに教えてもらったコンビネーションの
締めを打ち込むべく、半歩踏み込んで体重を再び右拳に乗せる



くっくっく…、効いたあ…！

マルタさんの打ってきた
コンビネーションはちやんと知ってる…！
凄さも威力も、どの角度、どのタイミングで打つのかも…！

（えっ…、私の動きが読まれていた…？）

うぐ…

はは、

うぐ…

私の顔面から
マスターのグローブを引き抜かれると
思わず声が出てしまう

（ずるい…、マスターがいつもそんなふう
にちやんと私の事見ててくれたなんて言われたら…
嬉しくてノックアウトしちゃうじゃない…♡）

マスターのパンチに私は身体ごと後ろにグラついて半歩後退する
でも今は…、マルタさんに届く…！ 俺のパンチが届く…！
だから力の差を理解したその上で…俺はマルタさんに勝ちたい…！

（もう…発来…！）
マスターはそのまま私が教えてあげたコンビネーションの
締めを打ち込むべく、半歩踏み込んで体重を再び右拳に乗せる





俺は半歩踏み込んだ渾身の右ストレートを
必死押しにマルタさんに叩き込む
反響した重い打撃音がリングに響く

バキッ!

三六三



それは出所を異にする、二重に重なった打撃音だった
右ストレートを振り切ると同時に俺の右頬に熱く重たいものが突き刺さる。
俺の右ストレートを貰いながらも
俺のコンビネーションの締めを讀んでいたマルタさんが
左ストレートを打ち返してきていた
自分が教えたパンチで、やられるわけにはいかない
お互いの汗とよだれが花火のようにリング上に飛び散る



マスタリはよるけた私に
半歩踏み込んだ渾身の右ストレートをガメ押しに打ち込んでくる
反響した重い打撃音がリングに響く

だっ!

三六

お互いの汗とよだれが花火のようにリング上に飛び散る

それは出所を異にする、三重に重なった打撃音だった。
マスターのコンピネーションの締めを譲りていた私は、
私の左頬にマスターの右ストレートを打ち込まれると同時に
私はマスターに左ストレートを打ち返していたのだ。
自分が教えたパンチで、やられるわけにはいかない。この……
お互いの汗とよだれが花火のようにリング上に飛び散る

フルフェイス

アキ





お互いにお互いのパンチを味わい、
両者ともに体勢を崩してわずかに距離が開く

（効いた…、マルタさんのカウンターパンチ…
でも俺のパンチもマルタさんに効いているはず…！）
俺は一刻も早く傾いた身体を立て直そうとする

ゲラッ

うん…

い…

うん…

お互いにお互いのパンチを味わい、
両者ともに体勢を崩してわずかに距離が開く

おぼろげ...

ゲラッ

いっしょ...

モロッ

（やるじゃない、マスター...
さすがに連続で貰ったからちよつと効いた...っ）
私は傾いた身体をすぐさま立て直す





マルタさんが俺より一瞬早く
 体勢を立て直しながらの左アッパーを繰り出す。


「このっ！」

ぐらついた身体を立て直せないままの俺は
 甘んじてマルタさんのパンチを受けるしかなかった

ガゴッッッッ！おっ……」

強烈な左アッパーに
 アゴ先を天井に向けて吹き飛ばされる

「マジで、完全に脳を縦に揺らされた……！」
 足元が千鳥足になりタウンを免れそうにない



私はマスターより一瞬早く
体勢を立て直しながらの左アッパーを繰り出した。
このっ！
ぐらついた身体を立て直せないままのマスターは
甘んじて私のパンチを受け入れるしかなかった
ガゴッ！
私の強烈な左アッパーにマスターは
アゴ先を天井に向けて吹き飛ばされる
（完璧な手技だええー！意識の糸）
マスターは足元が千鳥足になり
ダウンを免れられないだろう
いただきっ♡





はあ

お互いが荒い息をつきながらもマルタさんは俺をそのままコーナーに押し込んでいく
マルタさんのおっぱいが...
俺の胸と密着し、押し付けられるたびにむにむにと形を歪める。
俺はマルタさんの感触に包まれて
思わず衰りだした股間の膨張が止まらなくなってしまった



はあ

はあ

「タウンさせられる...!」
マルタさんの強烈なアッパーカットに脳を揺さぶられ
歪む視界と落ちていく膝に抗いながら目の前のマルタさんに
必死に抱きついてタウンを免れる





マスターのおちんちんは目を見紛うほど巨大でがっちがちに勃起してしまっていた
 マスターにおっきくしちやうて... 試合中なのにダメなマスターさん♡♡♡
 グローブでマスターのオチンチンを押し付けてから少し身を離すと
 (クリンチでフレイクのおちんちんを離す) 私までちよっと濡れてきちゃった...♡♡♡
 なかなか離れられなくて... 私はずっと快感がで身を固くする
 あっ...♡♡♡ ああ...♡♡♡ 思わずマスターが快感がで身を固くする
 私でそんなに興奮してくれるのは嬉しいですけど...仕方ないわよねえ...
 ...少し荒っぽくしますよ♡♡♡ 私はずっと快感がで身を固くする
 私はマスターのおちんちんをいたすらしたグローブを腰だめにして
 グローブを固く握り締めた

「もう...、ダメじゃないですがマスター...♡♡♡
 私とボクシングなんてできませんよ...♡♡♡
 マスターを抱きしめながら優しく耳元でささやく

「おちんちんは硬くなうてちやうて...♡♡♡
 マスター...♡♡♡
 マスター...♡♡♡
 マスター...♡♡♡





「ふっ!」
ガッコオッッ!
マルタさんのアッパーカーツが俺の顎を貫通し
そのまま天に向かって突き立った。
俺の足裏がリングから離れた。
俺の縮みが落ちたような衝撃が突き抜ける。
同時に目の前が真っ暗になった。



コぶっ！
ガッコオッ！
私のアッパーカットがマスターの顎を吹き飛ばし
そのまま天井に向かって突き立った。顎を吹飛ばし
マスターの後ろが天井に向かって発射されると
小さくジャンプするとリングから引き離され
そのままリングに尻もちをつくように崩れ落ちた





ぼとっ、ころころと音を立てて
さっき口の中からアツパーカ
吹き飛ばされた元パイプスガ
マルタさんの足元にみじめに
「どうですか？」これ上半身と下半身が分断されて
下半身が落ちていたでしよう？
俺の亀頭を揉みもみして刺激を与え、
快感をもたらしただけでマルタさんのグローブは
そのまま次の瞬間に俺のアゴに激痛をもたらしていた...
「その間に立ち上がってくださいな、マスター♡」
「このアツパーカはパンチがで
二連続で貰ってはいけないラン
膝が完全に笑って立ち上がるこ



ぼとっ、ころころという音を立てて
マスターの口の中から私のアツパーカットで
発射されたマウスピースがリングに落ちてきて
私の足元にみじめに転がった。
「どうですか？ これで上半身と下半身が分断されて
下半身が落ちましたよ？」
「彼のいきり立った男根を
弄のいきり立った男根を
彼のグロリーブで、私はそのまま次の瞬間に
彼のアゴに激痛という罰を与えたのだ。
「その間に立ち上がってくださいな、マスター♡
「わーん、つー、すりー！」
このアツパーカットが効きすぎたのか
マスターは膝が完全に笑って
立ち上がる事ができないでいる…。



おっしー

ふぁー

しーくす

ふぁー

「このまま負けちゃうんですか？
私に勝ってSEXするつもりで
あんなに大きく
してたんじゃありませんか？
そのままじゃいんですか？
カウントアウトしちゃったから
目の前のマルタさんがぼやけて見える。
自分の不甲斐なさにも悔しさを
泣きたくなってきた…
私を抱きたかったら、立ち上が
りませんか？
倒すべき相手であるマルタさん
に目の前で一喝されてしまった…」

「ふあー」
「すりー」

「ふあー、ふあーいぶ、
すりーっくす…
マルタさんが弾む声で
俺のカウントを着々と告げてくる。
目の前で下るすマルタさんの足元で
尻もちをついてダウンする俺は
立ち上がるつと足に力を込め
両のグローブを
両足のグローブを踏ん張るが
立ち上がる力が入らず、
立ち上がる事ができない…」

このまま負けちゃうんですか？
私に勝ってSEXするつもりで
あんなに大きくしてたんじゃな
そのままカウントアウトしちゃう
どうしようもなく悔しそうな顔
私を抱きたがってたなら、立ち
捨てられた子犬のような顔を
マスターを思わず目の前で一喝
マスターを思わず目の前で一喝してしまつたら…

ふおー
すりー

ふおー、ふあーいぶ、
すりーくす…
（このままで食いが下がってくるとは
正直思っていないかったな…）
強くなったマスターに
私のは思わなかったカウントを入れてしまっ
私の目の前で立ち上がるのと足に力を込め
両足の力が入らず、リングにつけて踏ん張るもの
一向に立ち上がる事ができないマスター…
（まだ終わってほしくないな…
もっとマスターと殴り愛したい…♡）



「せぶーん、えーいと……泣きそうな声を上げながら
コーナーマットに背をつけて、ずり上がるような形で
みっともないながらもなんとが立ち上がる

「本当ならこのままテルノックアウト♡、っていうところですけど
ちやんと立ち上がって来たんでまだ試合続行してあげますよ」
「おまけでマルをもらった気分になるがいまだ足元はおぼつかない……」

「でもこのままじゃ膝を差し入れてないと
またタウンしちゃいますね？
このラウンドでも一回タウンしちゃったら、
今度こそTKOでマスターの負けになっちゃうですよ
それならこのまま私の膝の上で休んでいたい？」



「実際マルタさんが俺の股に膝を差し入れてなかったら
いつ倒れこんでしまっかわからないような状態だ。
それでもマルタさんにボコボコの顔を覗き込まれて、いやいやと頭を振る
ふぶつ……マスターのグロッキーな顔、目の前でガン見……
このままじゃベル1の女の子にボクシングで負けちゃうですよ？
反撃……しなくちゃいけないでしょ？ ほら、腕を上げて……♡
私をノックアウトしてください、マスター♡」





「せーぶーん、えーいと……」
「うっ……」
「コーナーマットに背をつけて、ずり上がるような形で」
「みっともないながらもなんとが立ち上がる」
「な……い……」
「……」
「……」

「本当ならこのままテルノックアウト♡、っていうところですけど」
「ちやんと立ち上がったてきたんでまだ試合続行してあげますよ」
「マスターの股座に膝を差し入れて」
「今にも崩れ落ちてしまっそうなマスターの顔を覗き込む……」
「でもこのままじゃ膝を差し入れてない」
「またダウンしちゃいますね？」
「このラウンドでも一回ダウンしちゃったら、」
「今度こそTKOでマスターの負けになっちゃいますよ」
「それならこのまま私の膝の上で休んでいたい？」



「（こんなこと言われちゃったら悔しくて仕方ないですよね？）」
「私にポコポコの顔を覗き込まれて、マスターはいやいやと頭を振る」
「このままじゃレベルの女の子にボクシングで負けちゃいますよ？」
「反撃……しなくちゃいけないでしょ、マスター♡」
「私をノックアウトしてください、マスター♡」
「腕を上げて……♡」
「（マスターにノックアウトするのも、マスターをノックアウトするのも）」
「本音はどちらも捨てがたい♡」



（ここまで私のパンチに耐えられるなんて思いませんでしたよ）
（そう…ここまであのマルタさんのパンチを食らってましたよ）

（ここまでマルタさんに俺のパンチの効き目が薄かったのは
今までマルタさんの強打にビビって無意識に腰が引けていたからだ。
マルタさんの一方的にポコポコにされてようやく腹が据わった
ここまでマルタさんと真正面から殴り合って勝つ…！）
（マルタさんと真真正面にパンチを打ち込む胆力が
再びマルタさんに湧き上がってくる）
（心の奥底から湧き上がってくる）
（ひとつ…、パチっ！とマルタさんにボディを返す）
（ふんっ…、指も腕も動く）
（ふんっ…、ぼすっ！（足先もふくらばぎも動く））

（ハッ！）

（ハッ！）

（ハッ！）

（んんん！）

（みっつ…、バズッ！（肩も太腿も動く））
（よっつ…、ドスッ（腰も、握力も力が戻ってくる…））
（残念ですけど、ここまでかな？）
（じゃあドメ…刺しちやいますね、マスター…）
（ギョッ）とグローブが握りしめられる音が聞こえる
（だがそれはマルタさんのグローブだけじゃなくて
俺のグローブからも同じ音がした）





（ま）こまで私のパンチに耐えられるなんて思いませんでしたよ
（あ）あマスターもこんなにながなばったんだから
最後に気持ちよくKOしてあげて、ごほうびあげてもらいかな
（こ）こまで私にポコポコにされてマスターはまだやる気があるようだ
（マ）マスターのこういうところが好きなのよね
股に挟ませていた私の太ももを引き抜いてもしつかり立っている
すると、パチッとマスターは私にボディを返す
（必）死な顔
ぼすっ！（子供のパンチみたい）
んんっ

（あー）

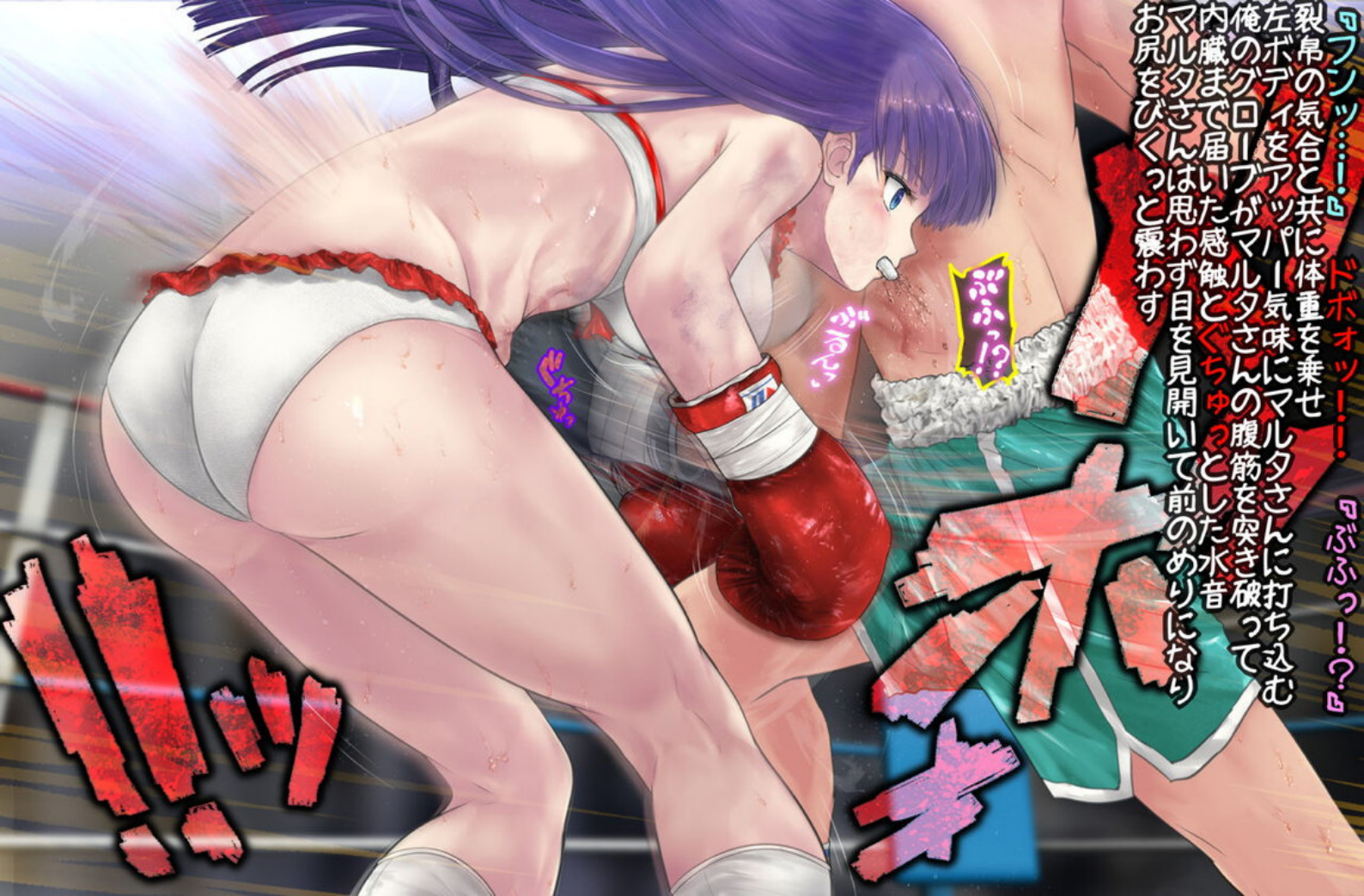
（あー）

（あー）

（んん）

（バ）スマッ！（うん）
（タ）メですよ、こんな弱々しいボディじゃあ…
（ド）ストッ（これはボクシングなんだから）
（残）念ですけれど、ここまでかな？
（ギ）ギッ（刺しちゃいますね、マスター）
（だ）だがそれは私のグローブが握りしめられる音が聞こえる
（マ）マスターのグローブからも同じ音がしていた





お尻をびくつかつと震わす
マルタさんは思わす目を見開いて前のめりになり
内臓まで届いた感触とぐちゃぐちゃとした水音
俺のグロッキーがマルタさんの腹筋を突き破って
左ボディをアッパル気味にマルタさんに打ち込む
裂帛の気合と共に体重を乗せ
ドボォッ！
BANG！-C.B

ぷふっ！

んんん

んんん

！！！！

オオオ



マスターが裂帛の気合と共に体重を乗せ
 彼のグロブが私の腹筋を突き破って
 内臓まで届いた感触とくちゅんとした水音…
 マスターのボディアッパーの衝撃が
 みぞおちから背骨を抜けて背後まで突き抜けて行った
 私はおわず目を見開いて前のめりになり
 お尻をびくっと震わす

ドボォー!!!
 ぷっ!?!

キッ



クッ

クッ

クッ...

クッ

クッ

クッ



俺の拳をお腹の奥まで突き入れられて
マルタさんの身体が硬直する
マルタさんの口元から押し出された液体がリングへとぽたぽたと落ちてい
マルタさん...やっぱり届く...俺のパンチはマルタさんにちゃんと届いてる...
マルタさんに押し込んだグローブに力がこもる

マルタ...

クワッ

グッ

グッ

グッ

グッ



私はマスターの拳をお腹の奥まで突き入れられて
身体を硬直させられてしまっ
私の口元から押し出された液体がリングへとぼたぼたと落ちていく
（何...? マスターにまだこんなパンチを打つ気があったの...!?）
私にぐりぐりと押し込まれたグローブに力がこもる

マスター...

グロ...

グ...

グ...

グ...



あまのこ

あまのこ

あまのこ



なにや?!

8888

俺のパンチをお腹に埋めたまま反撃の気配を見せるマルタさん。
だが俺は流れを奪わずそのまま右フックを
マルタさんの顔めがけて放つ

マルタさんの右拳が動く、
だが左ボディの入れ替わりに打ち込んだ
俺の右フックが
マルタさんの顔を左側へ弾き飛ばした

がるん!

バグンツッ!! おっ!!
グローブの革が弾ける音と共に
マルタさんの長い髪が扇状に広がり、
汗の玉に混じってマルタさんの髪の毛の
いい香りがあたりに撒き散った

8888

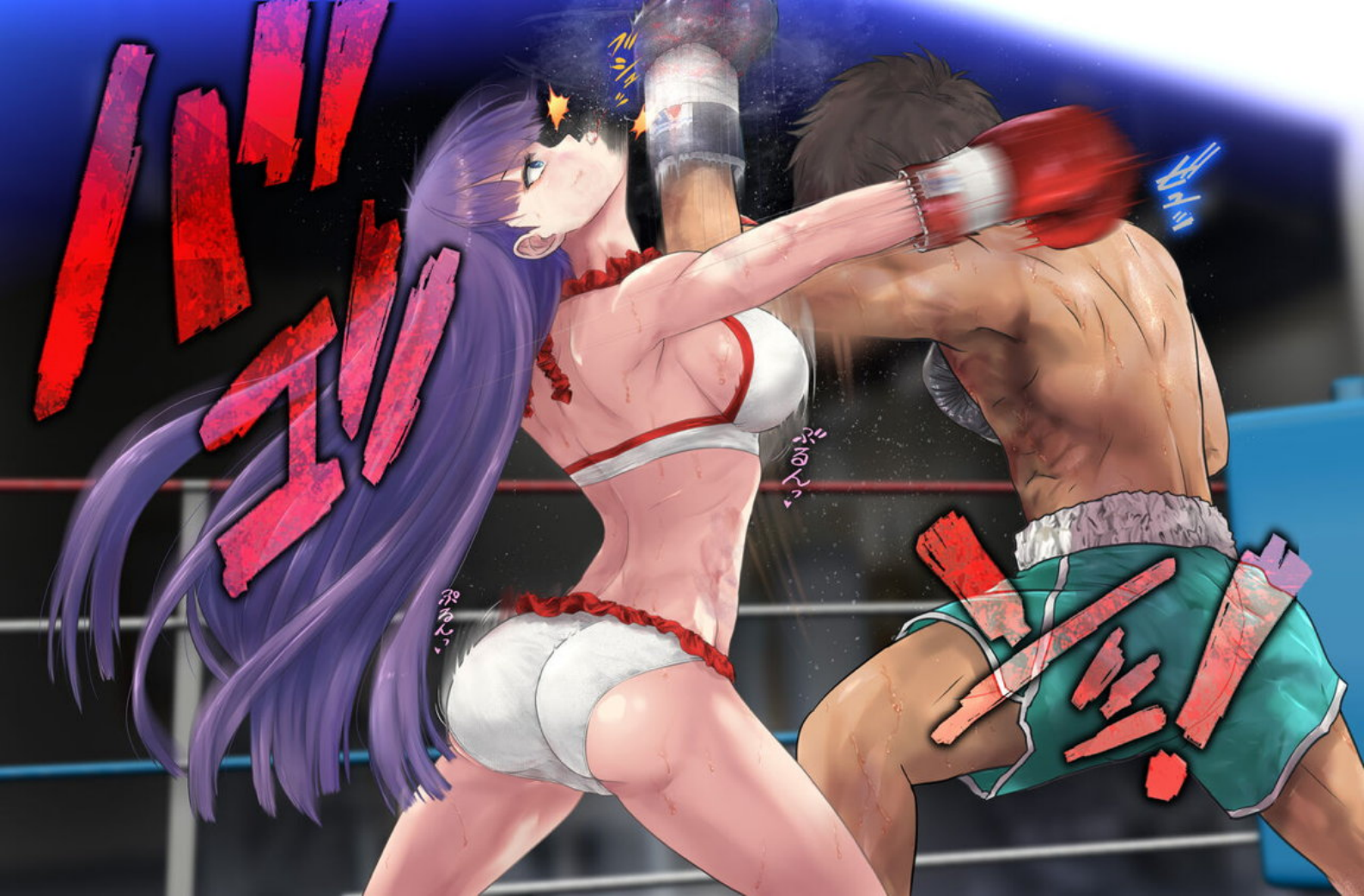
なにが?!

がるん

私はせりあがって来る嘔吐感をマウスピースと共に無理矢理体内へ押し戻して反撃のパンチを打ち返そうとする
（このくらいでケツ捲ってなんかいられないでしょっ!）
私は右拳をマスターの顔面に返そうと腕を振るう
だがマスターの左ボディの入れ替わりに
マスターの右フックが私のパンチより早く
私の顔を右側へ弾き飛ばした

バグンツッ! おっ!?!
グローブの革が弾ける音と共に
私の長い髪が扇状に広がり、汗の玉と
リングへと吹き飛ばす



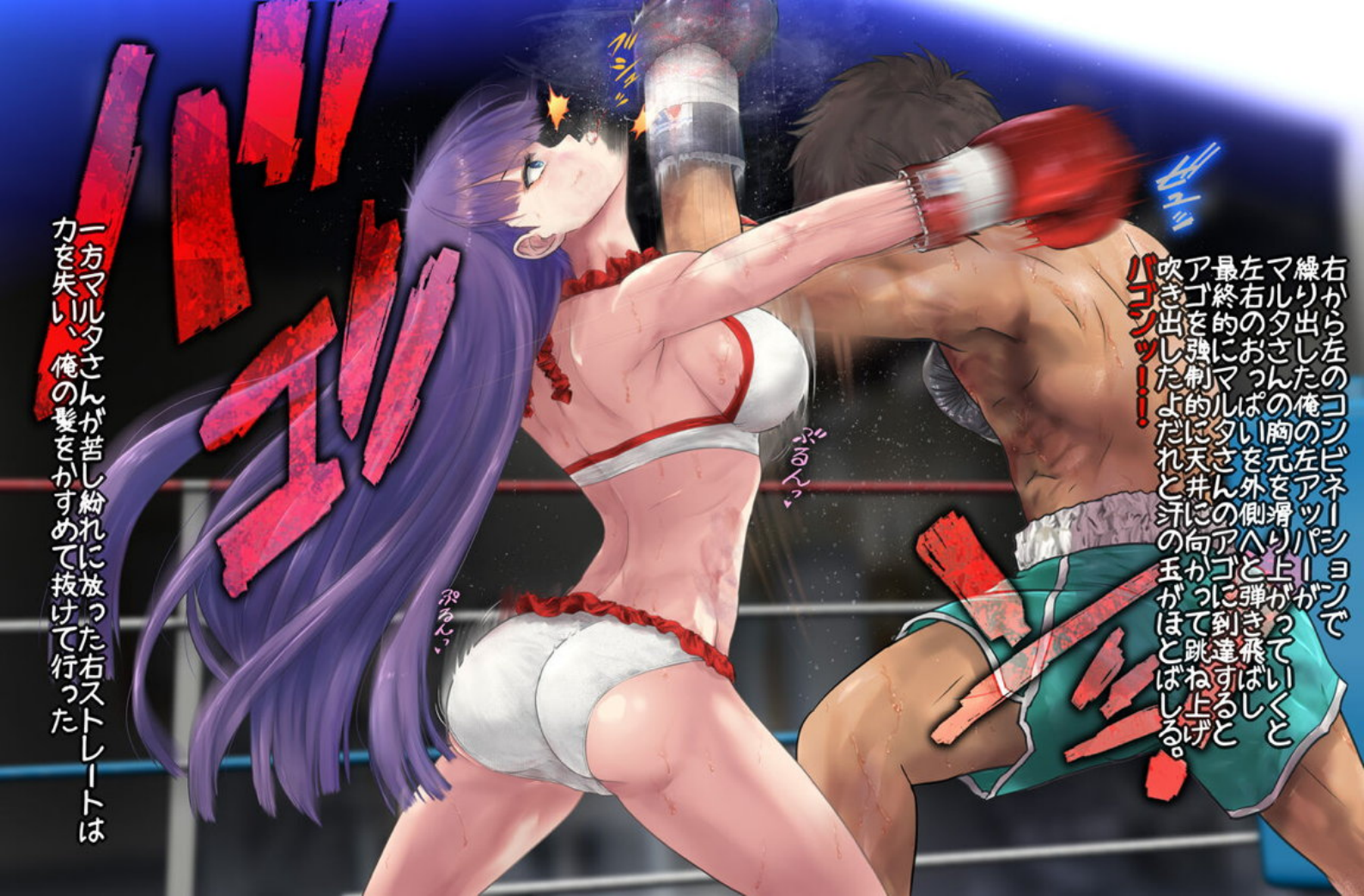


一方マルタさんが苦し紛れに放った右ストレートは
力を失い、俺の髪をかすめて抜けて行った

右から左のコンビネーションで
繰り出した俺の左アッパーが
マルタさんの胸を外へ弾き飛ばすと
最終的にマルタさんの向かって跳ねる
アゴを強制的に天井の玉がはねる
吹き出したよだれと汗の玉がはねる
ゴッソッ!!!

アゴ

アゴ



右から左のコンビネーションで
繰り出されたマスタリーの左アッパーが
私の胸元を滑り上がっていきと
左右のおっぱいを外側へと弾き飛ばしながら
最終的に私のアゴへと到達し跳ね上げると
アゴを強制的に天井に向かって跳ね上げると
吹き出したよだれと汗の玉がほとばしる。

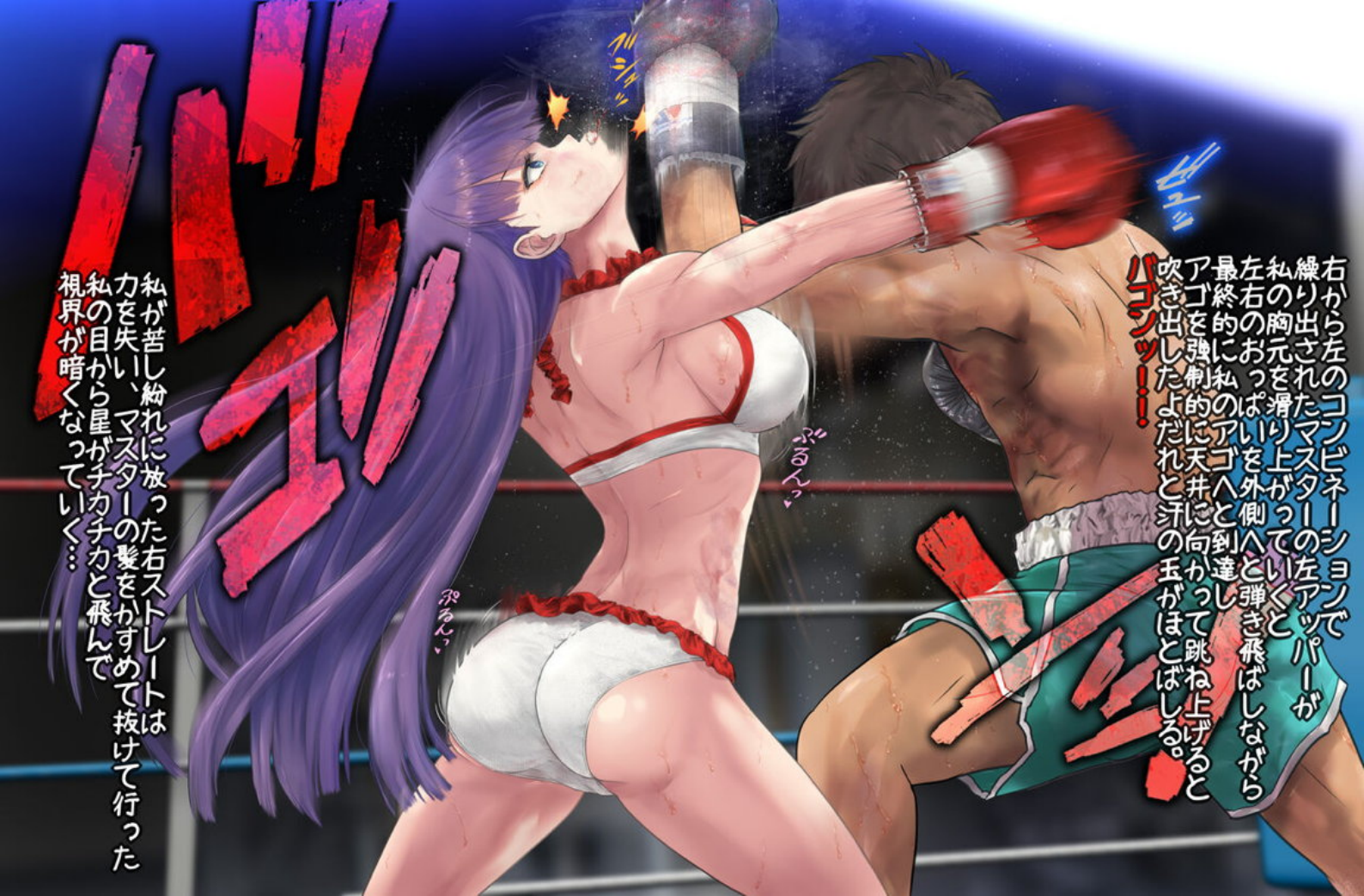
ゴッソッ!!!

私が苦し紛れに放った右ストレートは
力を失い、マスタリーの髪をかすめて抜けて行った
私の目から星がチカチカと飛んで
視界が暗くなっていく...

ゴッソッ!!!

ゴッソッ!!!

ゴッソッ!!!





ガッ
ガッ
ガッ

ガッ

ガッ

おっ...

おっ...

ガッ

ガク

ガク

ガク

あ...

だーりん

俺のアツパーで
アゴをカチ上げられたマルタさんの
ガードがだらりと落ち、膝がガクガクと笑っ
あぐ...
マルタさんがぐらりと前のめりになると
そのまま力なくマウスピースを
口の中からリングへと落した



ガッ
ガッ
ガッ

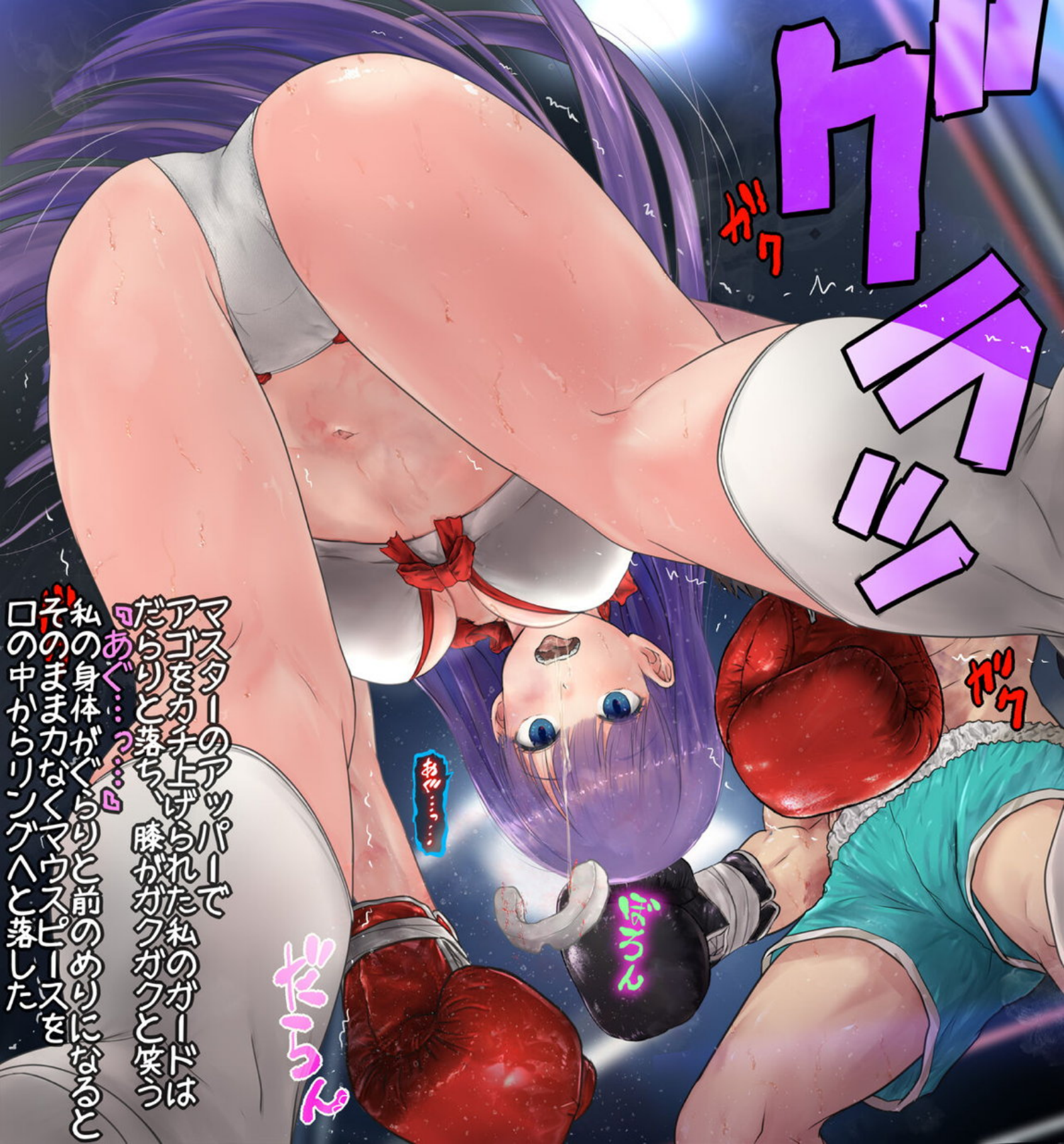
ガッ

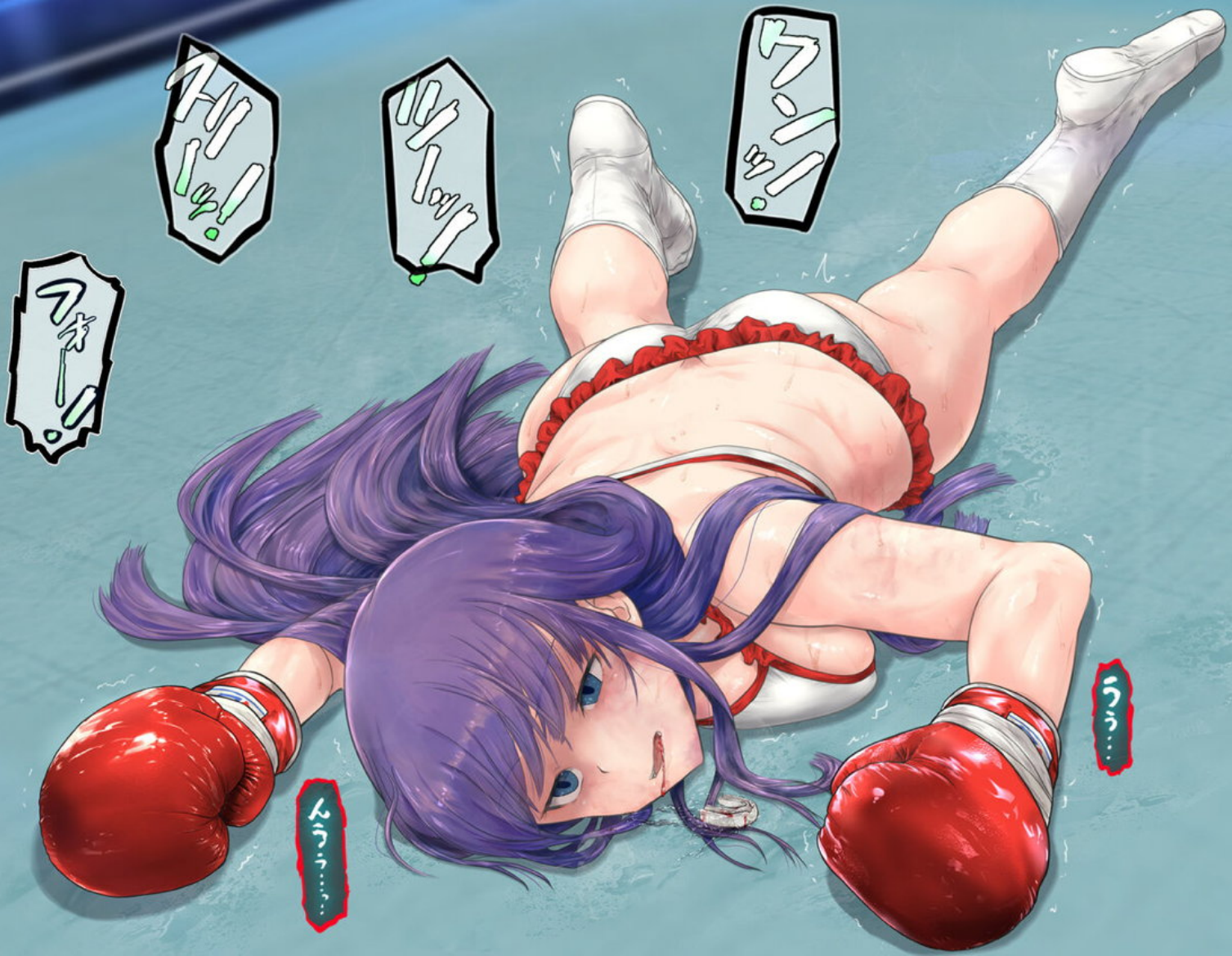
ガッ

おっ...

だっらん

マスターのアップパーで
アゴをカチ上げられた私のガードは
だらりと落ち、膝がガクガクと笑う
あぐ...
私の身体がぐらりと前のめりになると
そのまま力なくマウスピースを
口の中からリングへと落した





ズスウ……
リングに振動を残しながら
マルタさんの身体がうつぶせにマッパに落ちる
絶対沈むの無敵の戦艦の様だったマルタさんが、
ついに俺のパンチでリングに沈んだ……

うう……

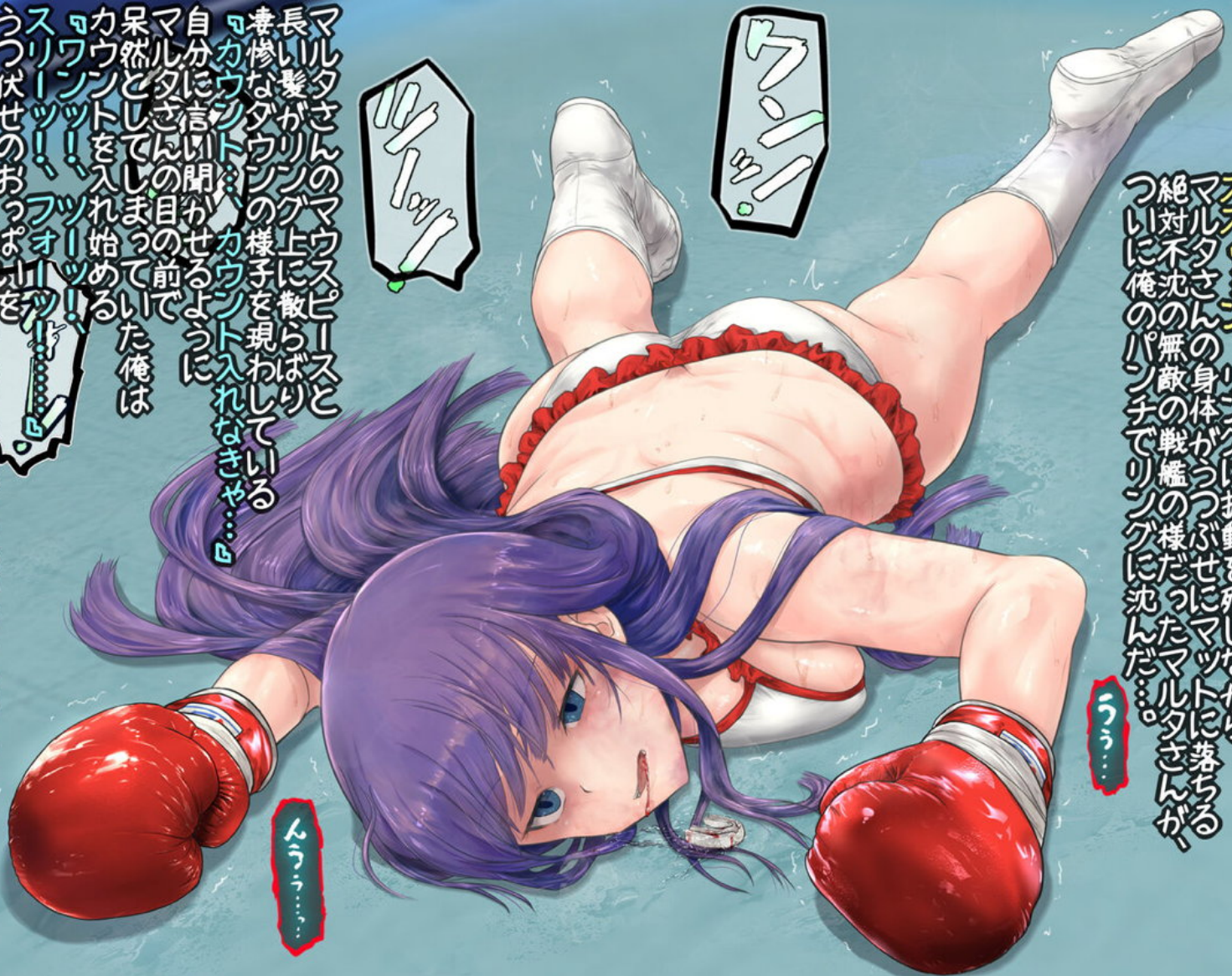
クンッ!

クンッ!

んうう……

マルタさんのマウスピースと
長い髪がリングの上を散らばり
凄惨なダメージの様子を現わしている
カウント入れなきゃ……
自分と言いつつカウント入れているように
マルタさんの目の前で
呆然としてしまっていた俺は
カウントを入れ始めた俺は

スリッパッ!! フォー!!
うつぶせのおっぱいを
リングに潰されながらマルタさんが
（虚ろな目がえっちな……）



スズウ……リングに振動を残しながら私の身体がうつぶせにマットに落ちた。とっとうマスターのパンチに耐えられず、私はキャンパスを舐めさせられたのだ。

うう……

クンッ!

クンッ!

私のマウスピースと長い髪がリング上に散らばり、凄惨なダウンの様子を現わしている。カウント入れなきや……

私の目の前で、呆然としてしまっていたマスターは、自分と聞いて閉かせるようにカウントを入れ始める。

スリッパ……フット……

うつぶせのおっぱいを冷たい感で意識を取り戻した。私はほっぺたに当たる冷たい感触で意識を取り戻した。

んうう……



は
—
っ

は
—
っ

『ファイブ！、シックス！...』
『そこまでカウントを数えるとマルタさんが腕をついて体を起こす
『はーっ、はーっ、はーっ...』
『効いたあ...』
『マルタさんが俺のアッパーに打ち抜かれた顎をさすりながら俺を見上げる
『セブン！...』



はーっ

はーっ

『はい、そこまでよ。今度は私がマスターをぶっ飛ばしてやるから』
『そう言うとマルタさんはマウスピースを拾ってすくっと立ち上がり
『マウスピースをはめながら俺に向かってファイティングポーズを取った
『くそ...』
『今のパンチが効いてないのか...？』

「ファイブ！、シックス！……」
「そこまでカウントを数えられると私は腕をついて体を起こした
「はーっ、はーっ、はーっ……」
「私はマスターのアッパに打ち抜かれた顎をさすりながら彼を見上げる
「やばっ、ちよつと意識飛んだ……」
「セブーン……」
「カウントがここまで進んでいるとは思わなかった」

はーっ

はーっ

「はい、そこまでよ。今度は私がマスターをぶっ飛ばしてやるから」
「そう言うとは私はマウスピースを拾って、あえてすくっと立ち上がり
「マウスピースをはめながらマスターに向かつてファイティングポーズを取った
「マスターのパンチが効いてるって悟られないように……」
「ふらつきそうな足元に喝を入れて私は拳を構える」







「マルタさん！ シッ！ シッ！
俺はガードを固めて
お互いのグロリアがぶつかり合う感触越しに
マルタさんのパンチ力を確かめる
（まだ力が衰えてない…）」



「ハア…、ハア…
立ち上がったマルタさんがじりじりと近づいてくる
ドウンを奪ったとは言えマルタさんのパンチで
追い込まれたのはこちらも同じで、
お互いベタ足で射程内に入る」



私はためらわずマスターにジャブを放つ
マスターはガードを固めて
私の様子をうかがっているようだ
（回復するまで効いてるって悟られるわけには…っ）



立ち上がった私はじりじりとマスターに近づくと
マスターを奪われたとは言え私のパンチで
マスターもかなり追い込まれて入るのは間違いはない
お互いともにもベタ足で射程内に入る







そののち私の胴体にまでパンチが到達し、
「パムンッ」という音を立てて私の胸が左右に大きく弾かれて揺れる。
「うあっ!」私は思わずたじろいで息が詰まった可愛らしい悲鳴を上げた。

いっ!

私の連打の繋ぎのタイミングに合わせて
マスターは的確に反撃を挟んできた。(しまった...!)

マスターは的確に反撃を挟んできた。(しまった...!)

マスターは的確に反撃を挟んできた。(しまった...!)

マスターは的確に反撃を挟んできた。(しまった...!)

マスターは的確に反撃を挟んできた。(しまった...!)

マスターは的確に反撃を挟んできた。(しまった...!)

マスターは的確に反撃を挟んできた。(しまった...!)

マスターは的確に反撃を挟んできた。(しまった...!)

あ?

いっ!

いっ!

いっ!



高橋

高橋



マルタさんの強烈なボディブローに俺は上半身を突き出したままゾンビのように前に歩みを進めそのままマルタさんの豊かなおっぱいに顔を預ける形になってしまった(へ吊り下された肉塊をユツケにするボディブロー...もらっちゃうけけないパンチをもらってしまった...)必死にクリンチの形でマルタさんの身体にしがみつ

ハア

はあ

ポコポコ

はあ

ハア

ポコポコにされた俺の顔を癒すせつかくの天国の柔らかな感触にも、苦しさが先だって味わう暇なんかなかった。マルタさんの火照った艶っぽい声が耳元で響く

はあ

マル

マスターは私の強烈なボディブローに屈して上半身を突き出したまま、

そのまま私の前におっぱいの間に軟着陸して顔を預ける形になってしまった。今度私の方が一瞬硬直して動きを止めてしまったその間にマスターは必死にクリンチの形で私の身体にしがみついた。

ハア

はあ

はあ

はあ

ハア

（やりすぎちゃったかな...？
マスターすごく苦しそう...）
胸の間で必死に呼吸を荒げるマスターに
思わず心配をしてみよう
お互いの火照った肌が触れて
私は思わず艶っぽい声を出してしまう



は

ハア

ハ

ハア

は

は

「ハア……ハア……ハア……ハア……」
ズリ落ちそうな体をマルタさんの身体をよじ登るように
ズリズリと肌を押し付けながら何とか体勢を立て直す
「ハア……ハア……ハア……ハア……」
お互いの熱い吐息で白い湯気が見えそうなほど
湿気と熱気を持った体を押し付け合う……



「マルタさんの柔肌が汗でぬめって……」
思わずマルタさんの肌触りを全身で堪能してしまう
あまりの気持ちよさに身震いしてしまっそうだ。
少しづつ体力が回復してくるが
お互い体を離そうとしない
自動ゴングが鳴るまで続いた
「カーンツ！」

「ハァ……ハァ……ハァ……」
マスターは、ずり落ちそうに体を私の身体をよじ登るように、ズリズリと肌を押し付けながら、何とか体勢を立て直す。
「ハァ……ハァ……ハァ……」
お互いの熱い吐息で、白い湯気が見えそうに、ほど
お互いの熱い吐息で、白い湯気が見えそうに、ほど
湿気と熱気を持った体を押し付け合う……



「マスターの火照った身体が、汗でぬめって……」
思わずマスターの肌触りを全身で堪能してしまっ
あまりの気持ちよさに、身震いしてしまっ
少しづつ体力が回復して、くるが
お互い体を離そうとしない、爛れた時間は
自動ゴングが鳴るまで続いた、カーンツ!





ゴングが鳴り、お互いが重い足取りでコーナーに戻る。
ハアッ...ハアッ...ハアッ...ハアッ...ハアッ...ハアッ...ハアッ...ハアッ...
身体が重く、座っている1分間は、熱くて痛い...
あつという間に過ぎ去っていく。
お強い...、やっぱりマルタさんは強い...
お互いに体力は底をつき、
次のラウンドが決着のラウンドになるだろう...
そういう予感をお互いに感じ取っていた

ハアッ

ハア

ハア

ハア



カーンッ！ ラウンドが始まり、ふたり、磁石が引き合うようにリング中央に向かって飛び出していく

ハマルタさんが与える試練に打ち勝って、俺はマルタさんに認められるんだ…っ！
同時に右ストレイトと
左ストレイトを繰り出すと
それは同時にお互いの顔に着弾した
バクンッ！！





カ
ン
ッ

カーンッ！ ラウンドが始まり、
ふたり、磁石が引き合うように
リング中央に向かって飛び出していく

「マスターに負けるわけには
いがないですよ……っ！」
同時に右ストレイトと
左ストレイトを繰り出すと
それは同時にお互いの顔に着弾した
バクンッ！！



（うぶ……？）
マルタさんの強烈な右ストレートに意識を吹き飛ばされそうになる
それでも体勢を立て直し、半ば無意識に同じパンチを繰り出す。
だがそのパンチは
追撃で踏み込んできていたマルタさんの
右ボディストリートをかウンター気味に
貫く結果となってしまうた。



おっぱい

おっぱい

『ドボオッ！』
『おっぱいっ！？』
噛み締めたマウスピースの隙間から
絞り出された液体がほとばしる。
ぐちゃっとマルタさんの拳で内臓が潰された嫌な感触……
だが俺は逆に腹部の痛みで吹き飛びかけた意識を取り戻した

マスターの強烈な左ストレートに意識を吹き飛ばされそうになる。それでも私は体勢を立て直し、半ば無意識に同じパンチを繰り出す。だがそのパンチは体勢を崩しながら打つ死にパUNCHとなってしまう。死にパUNCHは追撃で踏み込んできていたマスターの左パンチに私の右ボディストレートをカウスターの左パンチに合わせる事となり結果的に会心のラッキーパーンチとなった。



私

ドボオッ！

「ドボオッ！？」マスターが噛み締めたマウスピースの隙間から絞り出された液体がほとぼる。ぐちゃっと私の拳の奥でマスターの内臓が潰される感触：（もろった！）私はこの気持ちいい感触に優越感すら感じてしまっていた。





バゴッ?

私沈め……!!
私はマスターにどめを刺さんと右フックを繰り出す
だがそれよりも早くマスターの反撃の右フックが
私の左頬にカウンターの届いていた
バゴッ!!

バゴッ!!

バゴッ!!





Shirayuki

Shirayuki

続けざまにマルタさんのボディへ
ボディアツパイを突き入れる
ドポオツ!
マルタさんの腹筋を貫いて
内臓をえぐり潰す感覚が
拳に伝わってくる
（くっだが俺の方も
スタミナが限界だ…）

クッ
クッ
クッ
クッ
クッ

クッ
クッ
クッ

クッ
クッ
クッ



Shinobu

Shinobu

マスターは続けざまに私のボディ
ボディアツパーを突き入れた
ドポオッ！
マスターの拳が私の腹筋を貫いて
内臓をえぐり潰してくる感触
ぐえ...っ！ まずい...！ 息が...！

!!!

!!!







(これで...これで決める...!!
イっちゃまえマルタさん!!)

無呼吸で一心不乱に
ロープに詰まったマルタさんを連続で打ち続ける
パンチを受けるたびにマルタさんの頬や体から
汗とよだれの飛沫がキラキラとしびいて飛んでいく

うっ...

うっ...

ぶっ!?

パンチの連打でマルタさんの身体が
足が浮き上がるほどロープに押し付けられ
ロープとコーナーポストが金属的な悲鳴を上げる
(もっ...息が...)
俺の攻撃の嵐がわずかに緩んだ気配に
マルタさんの瞳に力が宿った気がした



ロープに詰まった私を、好機と見たマスターが
一心不乱に連続で打ち続ける

パンチを受けるたびに私の顔や体から
汗とよだれの飛沫がキラキラとしびいて飛んでいく

うっ...

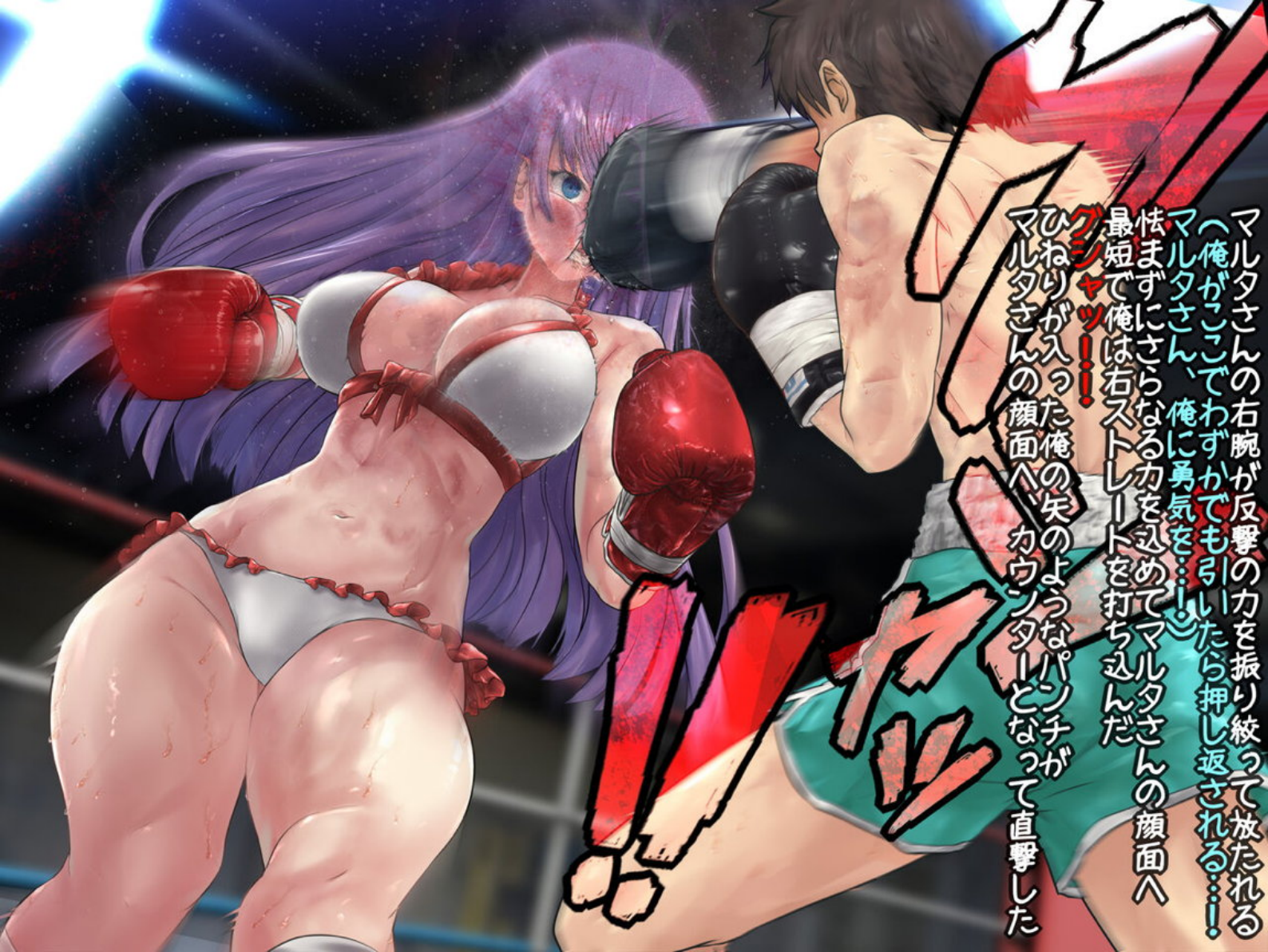
ぶっ!!

ドッ!!

ガッ!!

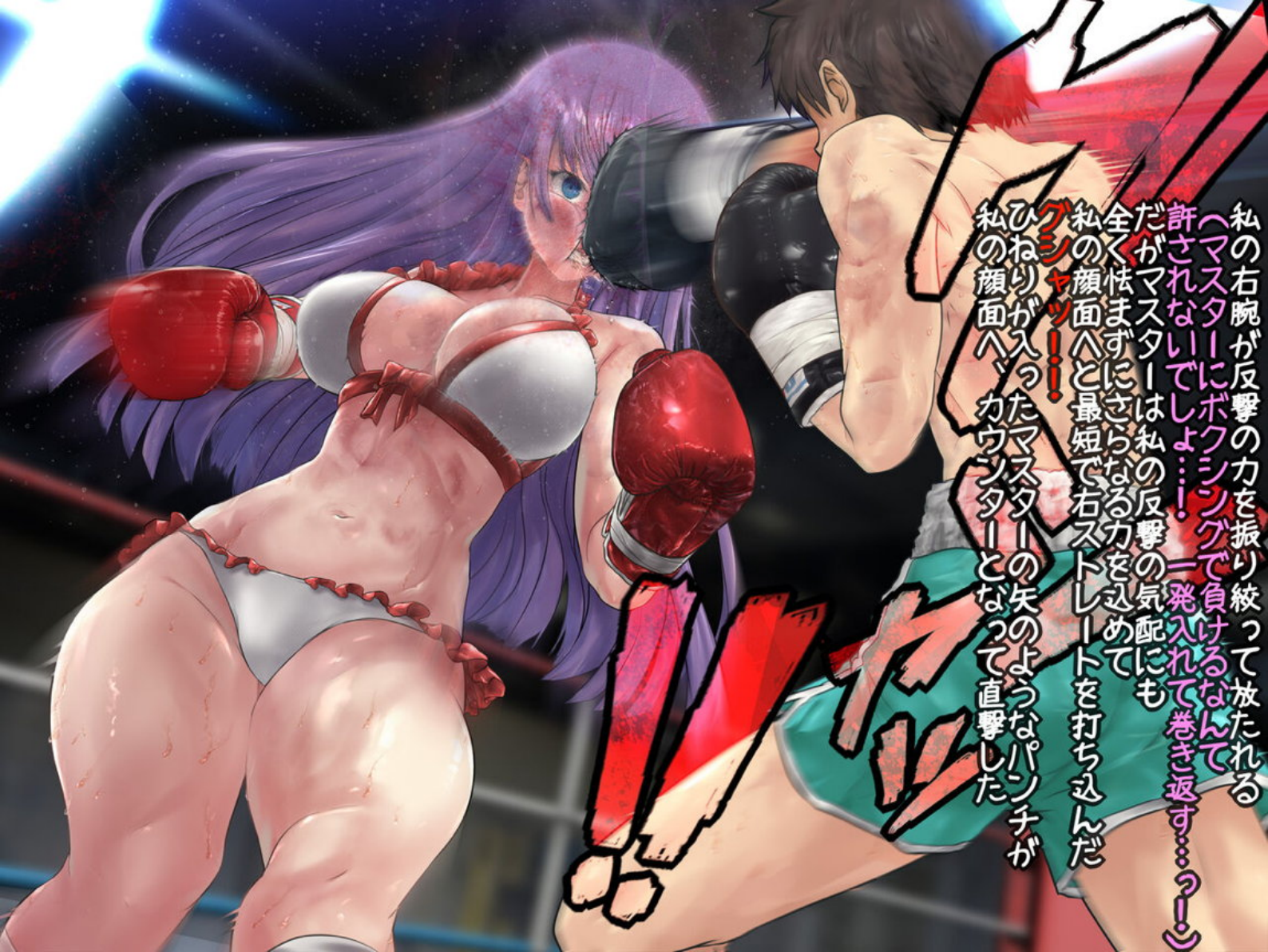
パンチの連打で私の身体が
足が浮き上がるほどロープに押し付けられ
ロープとコーナーポストが金属的な悲鳴を上げる
暴力の嵐の中、私は覚悟を決めて
最後の反撃する力を拳に込めた





マルタさんの右腕が反撃の力を振り絞って放たれる
（俺がここでわずかでも引いたら押し返される…!!）
マルタさん、俺に勇気を…!!
怯まずにさらなる力を込めてマルタさんの顔面へ
最短で俺は右ストレートを打ち込んだ
グッヤツ!!!
ひねりが入った俺の矢のようなパンチが
マルタさんの顔面へカウンターとなって直撃した

カ
ン
タ
ー



私の右腕が反撃の力を振り絞って放たれる
へマスターにボクシングで負けるなんて
許されないでしょ……!!
だかマスターは私の反撃の気配にも
全く怯まずにさらなる力を込めて
私の顔面へと最短で右ストレートを打ち込んだ
グシヤツ!!!
ひねりが入ったマスターの矢のようなパンチが
私の顔面へ、カウンターとなって直撃した

~~~~~

~~~~~




おう...

「あう……」マルタさんが弱々しい声を吐きだして
とうとう俺に隙を見せた
（マルタさん……っ）
「俺のパンチで……イけっ！」

俺の渾身の力を込めた右アッパーが
マルタさんのアゴに吸い込まれる
グシャッ！！
（俺のグローブがマルタさんに届いた……！！）



「あう……意識が飛びかけて、思わず私は弱々しい声を吐きだして
マスターに隙を見せてしまった
（マスター……っ……）
「あう……
俺のパンチで……イけっ……」

「クッ……」

マスターが渾身の力を込めた右アッパーが
ノーガードの私のアゴに吸い込まれる
グンッ……
（マスターの顔……、
縦に流れて……見えなく……）





...

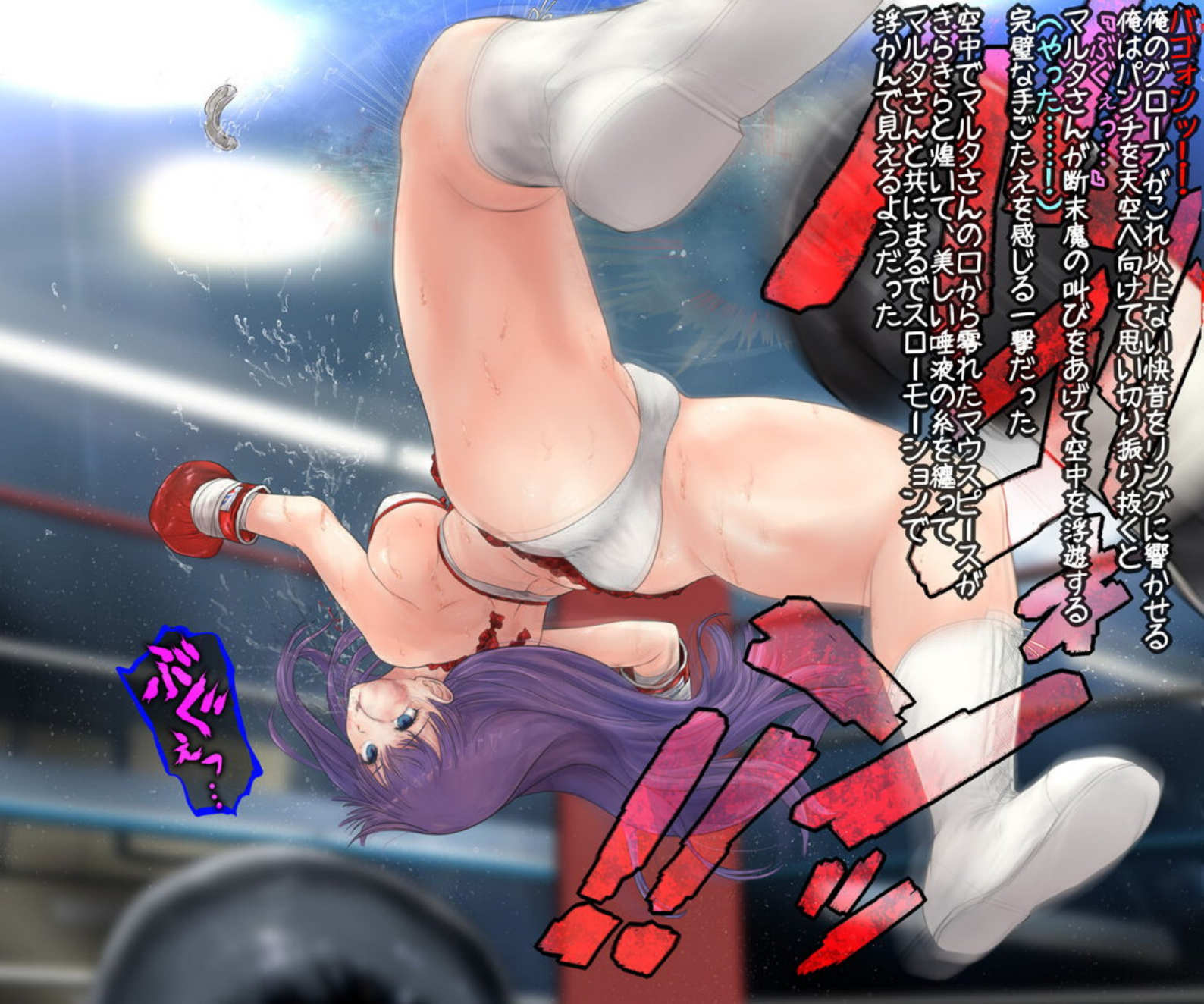
バコオンッ！
俺のグローブがこれ以上ない快音をリングに響かせる
俺はパンチを天空へ向けて思い切り振り抜くと

マルタさんが断末魔の叫びをあげて空中を浮遊する
（やった……！）

完璧な手ごたえを感じる一撃だった

空中でマルタさんの口から零れたマウスピースが
きらきらと煌いて、美しい唾液の糸を纏って
マルタさんと共にまるでスローモーションで
浮かんで見えるようだった

あ……



パゴオンツッ!
マスターのグローブがこれ以上ない快音をリングに響かせる
マスターはパンチを天空へ向けて私の身体ごと思い切り振り抜くと

私は断末魔の叫びをあげて空中を浮遊する

それは私に敗北を感じさせるのに十分な二撃だった

空中で私の口から零れたマウスピースが

唾液の糸を纏って

私の身体と共に、地球を巡る人工衛星のように
リングの真上を浮遊している…

あつ…



アキ

アキ

アキ

アキ

アキ

宙に浮いたマルタさんの肢体は
派手な音を立てて
ハードランディングでリングに墜落し
吹き飛ばされたマウスピースが瞬遅れて
ぼとつと湿った音を立ててマットに転げ落ちた。

俺は思わぬ絶え絶えな状態に陥り、口をついて出してしまう

あつあつ

はあ

はあ

あつあつ

はあ



宙に浮いた私の身体は派手な音を立ててハイドラノンディンクでリングに墜落し吹き飛ばされたマウスピースが二瞬遅れてぼとつと湿った音を立ててマットに転げ落ちた。

「はあ、はあ、はあ……はあ……やった……」

半失神状態の私にマスターのそんな声がおぼるげに届く（まだ……まだやれる……）

あつ……

はあ

はあ

おぼるげ

ぼとつ





私がか細い息を吐いて後頭部をマットに落とした。

スリー

ツ

あ

わ

どう

マスターの胸元に擦れておっぱいが出てくる。意識が途切れてしまっている。数えて聞いている。上の方で聞こえても。マスターの胸元に擦れておっぱいが出てくる。意識が途切れてしまっている。数えて聞いている。上の方で聞こえても。マスターの胸元に擦れておっぱいが出てくる。意識が途切れてしまっている。数えて聞いている。上の方で聞こえても。



『フアイブ、シックス…』
私の身体がマスターのカウントに合わせるかのようにびくびくと痙攣する

ナイン!

テン!

ソ…

は…

はみ…

びく…

びく…

びく…

『セブン、エイト、…』
（マスターにボクシングで負けるなんて
ダメなのに…）

マスターのパンチに屈服するの…
（こんなに気持ちいいなんて…）

『ナイン、テン！』
勝負が決した瞬間
私の身体は二際びくびくと痙攣してしまう

『アイ…』
マスターとの試合は私の敗北KOで終了した
私の股間にじわっと染みが広がる
（マスターのパンチでイっちゃったあ…）

ホカ

ホカ







射精感が最高潮になったとこで
マルタさんの中に遠慮なく射精する
ビュッ! ビュルルッ!
ふああっ♡
マルタさんの中にどぶどぶと注がれていく大量の精液
マルタさん最高...気持ちいい...♡

ドムルムルッ

ムッ

ビュッ

ムッ...
ムッ



（一番奥に押し付けてきたあ...♡来るっ♡）
マスターがおちんちんを私の膣壁に押し付けると
どくどくと私の中に遠慮なく射精する
ビュッ! ビュルッ! ふああっ♡
私の中にどぶと大量の精液が注がれてくる
♡マルタさん最高...♡気持ちいい...♡

ドッ! ドッ! ドッ!

ドッ!

ドッ! ドッ! ドッ!

ドッ! ドッ!





たっぱり射精しましたね...♡
三人、荒い息を吐いて一息ついた後
ペニスを引き抜くとマルタさんのおまんこから
マリスさんの中から射精したように糸を引いて垂れ落ちる
イルアップキスしたように糸を引いて垂れ落ちる

ハア

ハア

ハア

ハア

たっぱり...
どろ...

おんっ、マルタさん...♡
そんな様子に釣られて
マルタさんにねっとりとしたキスをする

ハア



回たっぱり射精しましたね...♡
二人、荒い息を吐いて一息ついた後
マスターがおちんちんを引き抜くと
私のおまんこから射精されたこいつで
ディーアキスしたように糸を引いて垂れ落ちる



ハア

ハア

ハア

ハア

たっ...♡

どろ...♡

おんっ、マルタさん...♡
そんな様子に釣られてか
マスターが私にねっつりとしたキスをする

ハア

「ま…、まだするの…？」
マルタさんを抱き上げてロープに押し付けるとミニ
そのままロープの反動を利用して連続ピストンを開始する
「あうっ♡♡♡おんっ♡♡♡はうっ♡♡♡」
ギンギシとロープが掛けられる荷重に
悲鳴を上げるのと同じタイミングで
マルタさんも嬌声を上げる
(されるがままのマルタさんがわいっ…♡)

あうっ♡♡♡

おんっ♡♡♡

はうっ♡♡♡

はうっ♡♡♡

おんっ♡♡♡

あうっ♡♡♡

おんっ♡♡♡

あうっ♡♡♡

はうっ♡♡♡

おんっ♡♡♡

マルタさんのおっぱいに胸板を押し付けながら
密着したまま、さらに獣のように
腰をマルタさんに打ち付ける
「またイクよ、マルタさんっ♡♡♡びゅくびゅくっ！」
今度も遠慮なくマルタさんの中出しする

あうっ♡♡♡



「ま…、まだするの…？」
マスターは私を抱き上げてロープに押し付けると
そのままロープの反動を利用して連続ピストンを開始する
「あ…っ♡♡♡おん♡♡♡はっ♡♡♡」
ギンギンとロープが掛けられる荷重に
悲鳴を上げるのと同じタイミングで
私も嬌声を上げる
（マスターのされるがままになってる…っ♡♡♡）

あゝ

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

おん

私のおっぱいに胸板を押し付けながら
密着したまま、さらに獣のように
腰を私に打ち付けてくるマスター
「またイクよ、マルタさんっ♡♡♡びゅくびゅくっ！」
今度も遠慮なく私の膣に中出しする

おん



おふくっ、気持ちよかったあ...♡
 おぶう...♡
 マルタさんはロープにもたれて
 グロッキーになったボクサーのようになっちゃった
 マルタさんからペニスを引き抜くとぼとぼと
 マルタさんが垂れ落ちる
 精液がリングにまだ俺とボクシングしようね♡
 マルタさん、また俺とボクシングしようね♡
 そう言っ失神状態のマルタさんに再びキスをした

おぶう

グッ

ガク

ガク

ガク

おぶう

グッ

グッ

ガク

